幾度か出て居ますし、昨年の春中、能くお入でだつた花子さんと思はれる女も出て居るぢやありませんか。描いてある事象だつても、思ひ當る事が澤山あります。だから、私も全然經驗をお積みなさる道具に使はれて居たんですは……いゝえ、然樣ですとも……いゝえ、何と御辯解なすつたつて、其に違ひないんですもの……ぢや、何ですか。實驗以外の事には筆を執らないと云つてらつしやりながら、」

『お前の樣に、小理窟ばかし云つてたつて詮樣がない。』

『小理窟ですッて。所天には小理窟かも知れませんが、私には一大事ですは。私はまた、所天が何も其樣に語を種々になさらないだッて、おれはお前の云ふ通だし、久能木に云つた語の通だッて、明々地に仰有るが可いと思ひますは。』

『乃公が作家でなかつたら可かつたんだ。』と、紫瘦は淋しく笑ふ。

都根子も笑つたが、其は冷かな笑ひだ。

『所天が作家で居らつしやらうが、然樣でなからうが、私は唯眞實愛して居て下されば可いんですは。眞實愛してさへ貰つてたら、私は所天が何を爲すつて居らしッたッて、喜んで從つて居る意でしたの。私は所天見たいに、經驗を積みたい爲に嫁んぢやアないんですから、眞實愛されてさへ居たら、所天が乃公と一緒に放浪しろと仰有つたッて、縱んば路傍に立つて食を乞はうと仰有つたッて、私決して否は云はない意でしたけれども、經驗をお積みなさる爲の妻としてなら、もう一日だつても、御一緒に居るのが可厭ですは。所天は、所天と心も趣味も同じの方と、放浪生活にお入りなさるが能う御座んすは。』

『都根さん、お前は能く考へた上で、其樣事を云ふのかい。』と、紫瘦は眞箇顏色を變へて、眼色も險しくなつた。

『えゝ、充分考へましたは。』

『では、離別して呉れと云ふんだね。』

『はい。』

『其樣事は出來んよ。』

『ぢや、依然道具にして、遣つて居ようッて仰有るんですか。』

『だれが其樣事を云つた。』と、愛えず聲を高めたが、玄關に水鏡が聞いて居ることに氣付

いて、また聲を低くし、『お前は激してるから其樣事を云ふんだらうが、些と輕卒ちやないかい。能く考へて見るが可い――二三日能く考へて見た上で、更めて相談しちやア如何かい。』

都根子は直ぐに答へようとしたが、表の格子戸の開く音がしたので躊躇つて居る。暫時すると、水鏡が足音高く、無遠慮に手荒く唐紙を開けて、

『先生、兒玉君が誘に來ましたから、散歩にまゐりたいと思ひますが、御差閊はありませんでせうか。』

『よろしい、行つて來たまへ。』

『では行つてまゐります。奥さん、何か御買物はありませんでせうか。』

『何もありませんでしたよ。』

『行つてまゐります。』

水鏡が鳥打帽（ハンチング）を被り、洋燈（ランプ）の心を細めて家外へ出ると、月が能く冴えて居る。軒下に待つて居た權二が手招ぎすると、二三間彼方の塀の蔭から見はれた鴨脚返の女はお須壽だ。

三人は太田の家を四五間遠かるまでは無言で居たが、水鏡はさも愉快さうに、

『お須壽さん、能く來たですな。』

『久能木氏に逢ひたい一心だからね。』と、權二が笑ふ。

『あらうそよ、私美都子さんを見たいからよ。』

『如何ですかなア。併し、三人で押掛けたら、流石の久能木君も慈くだらう。』

『無論だとも。また大いに驚かさなきやア滿らないや。』

『新見附から電車だね。』

『さうさ。』

『私いやよ、彼家へ行つてから種々な事をお云ひなすッちや。』

『君に耻辱をかゝせる樣な事を爲るものかね。誰だと思ふ兒玉だよ。』

水鏡が突如に大聲で笑出したので、權二は呆氣に取られながら、

『何が可笑いんだ。』

『歩きながら話さう。』

また高く笑つたが、紫瘦夫婦の今夜の衝突を盛高に話しながら、土手に沿うて南へと行くのである。

（三一一）

長夫が自分は自分で成る樣に成つて了ふと云ひ捨てゝ家を出去つた擧動には、勝彌も一方ならず驚きもし心配もした。けれども、長夫が此樣擧動を爲るのは珍らしからず、今度に限つてと云ふのではない、長くも二日、短い時には其日の中に歸宅するが例であると云ふ。斯う知れて見ると、別に心配するにも及ばないが、如何にせば重勝夫婦と長夫との間が調停し得られて、圓滿なる家庭を作る事が出來ようか。勝彌は其善後策に就いて左思右考へた上で、辛うじて斯うもしたならばと思得た事がある。で、千代乃と重勝夫婦とを座敷に來て貰ひ、元二と美都子の同胞をも其傍に在らしめ、善後策に就いての意見を述べる事にした。

勝彌の所謂善後策とは、二百圓は柏木一家の共有物として銀行へ預け入れ、急場の用に供する外、濫りに使用するを得ないものと定め置き、一家の生活費は前に倍した努力をもて之を補ふ事にしたい。就いては、自分は月々二十圓宛出金する事に爲ようから、長夫にも銀行の俸給二十圓を出だしめる樣にしたい――其内から應分の小遣を與へる事は斷るまでもない。二人の分を合すれば四十金の月收となるのだが、自分と鐵三を加へて八人の生活費としては無論不足であるから、重勝も一厨努力して收入を計つて貰ふ事にする。一家擧つて努力する決心であつたら、世路が如何に艱難であらうとも、押通せない事はあるまいと思ふ。斯して斷えず努力しつゝ進んだら、多少の畜財も出來る事になつて、今日の衝突も昔語となる時節が來るであらうと信ずる。と云ふのである。

千代乃を始め、長夫が勝彌の意見に服するか如何であらうか、恐らく應じないであらうとは危みながらも、勝彌が自ら進んで過分の宿料を拂込ふと云ふ好意に對しても、左右の異議を唱ふべきでないから、長夫が歸宅したら一同から勸めて見ようと云ふ事に決した。

其内に夜に入つたが、長夫は尙ほ歸つて來ない。今夜歸らねば明夜は必ず歸るであらう

と、元二が受合ふ樣に云ふので、勝彌も其まで投擲らかして置く事にした。蟲て夕飯も濟み、暫時は一同茶の間で雜談を試みたが、今夜は月は好し暖かくはあり、勝彌は大通へ散歩に行かうと元二を促し、美都子にも可厭でなくば同行せぬかと勸めて居ると、門の耳門が明いたので、長夫が歸つたのだと口へは出さねど、元二が笑顏を作つて勝彌を見た時、聞こえた話聲の一人は兒玉權二らしい。

元二は苦い顏を爲ながら母を見返り、

『兒玉さんの樣だよ。』

『さうらしいね。』

『元二君〳〵、』と呼んだのは果して兒玉だ。

元二はいや〳〵玄關に出て行くと、月影に男が二人立つて居る。

兒玉は門の方を見返りながら、

『須壽さん、何を爲てるんだ。』

今一人の男も、

『此處まで來た癖に何ですよ。入つたら可いでせう。』

元二は其聲に小川水鏡と知つて、可厭な奴が可厭な奴と何だつて揃つて來たんだらうと不快で堪らない。

『僕が連て來る。』

兒玉は門の方へ急いで行つて外を見ると、一緒に來たお須壽の姿が見えない。

『おや居ない。如何したと云ふんだ……何だ、彼處に返つて行きよる……小川君、君は其處に待つてたまへ、僕はお須壽を捕まへて來るから。』

駒下駄の音高くお須壽を追掛ける。

水鏡は格子戸に寄添ふて內を透して見ながら、

『柏木君、久能木先生は御在宿でせうね。』

『御在宿です。』

『小川が伺ひましたッて取次いで下さい。』

『はい。』

元二は返辭は爲たけれども、上口に立つた儘で、直ぐ取次ぎさうな樣子が無い。

『兒玉さんは何處へ行かれたんです。』

お須壽が門外まで兒玉等と共に來て居る事は、元二も既に察して居たけれども、態と斯う問うて見た。

『山田の娘が、是非久能木さんに逢はせて呉れろと云つたさうでしてな、兒玉君が伴れて來たんですが、門の前まで來ると、羞しくでもなつたんでせう、入ッて來ないから、兒玉君が呼びに行つたんです。』と云つて小聲になり、『久能木先生はなか〳〵艶福家ですな。へヽへヽヽ。』

元二は何んとも返辭を爲ない。

『元二君。』と、勝彌が奥から聲を掛けて、

『何人かね、來た人は。』

『兒玉さんに小川君です。』

『なに小川だつて。太田君所のかね。』

『然樣です。』

『妙な人が來たね。太田君の使に來たのなら、君が其處で用を聞いて呉れたまへ。』

『君、使に來たんぢやアないんです。』と、俄かに小聲で、『久能木先生は僕を誤解して居でだと見えて、僕を好まれん樣ですが、何も困つて了ふ。』

好まれないのは當然だと、元二は口の中に呟き、奥に向つて大聲で、

『太田さんの御使ではないさうです。』

『さうかね。』とばかりで、勝彌は再び問ふ樣子もない。

元二が入れと云はないので、水鏡は尙ほ格子戸の外に居ながら、内を差覗いたり門の方を見返つたりして所在なげだ。

石段を上る足音がする、門を手荒く閉める音が聞こえると、權二が息を切りながら、さも失望したらしい語調で、

『小川君、とうとお須壽に逃げられッ了つたよ。切角、此處まで伴れて來たんだのに、殘念だね。』

『急に差しくなつたんだと見えるね。』

『途中で、君と僕との談話を聞いてから、急に氣が變つたらしいよ。作戰計畫を根底から破壞された樣なものだが、何も止むを得んさ。此上は唯突貫するんだね。』

『兒玉さん、作戰計畫なんて大變な譯なんですね。』

元二が斯う云つたので、權二は口を滑らすではなかつたと氣付くと、大聲に笑出して、

『なアに何でも無いんだよ。久能木君は在宿かね。』

『お居でゝす。』

『長夫君は。』

『先刻何處か行つた樣です。』

權二は格子戸を開けて入つて、

『小川君、入りたまへ。』

小川は格子戸を入つて、權二の後に尾いて玄關を上つた。

『御祖母さんも無論御在宅だらうね。』

『さうです。』

元二は權二等を座敷へ案内したものか、茶の間に入れたものかと躊躇つて居ると、權二は無遠慮に座敷の方へ行き、唐紙を開けて勝彌を見るより、

『久能木君、其後は久濶でしたな。小川君を誘つて遊に來たんです。』と、後を見返り、

『君入りたまへ。』

水鋭は俄かに氣味が惡くなつたかの樣子を爲ながら座敷に入つて、勝彌に丁寧に叩頭をして、

『先生、御邪魔に伺ひました。』

勝彌は其には答へず、

『元二君、茶を入れて呉れたまへ。』

『はい。』と、元二は茶の間へ行く。

元二と入違にお瀧が座敷に入つて來て、鐵三を抱いたまゝ窮屈さうに權二へ會釋を爲し、

『兒玉さん入らッしやい。大變にお見限ですのね。』

『いや、其樣譯ぢやないですが、』と、權二は頭を搔き〳〵、『意外に御無沙汰爲ました。皆さん御異變もありますまいな。』

『はい。お蔭さまで一同丈夫で御在さすよ。』と、お瀧は水鏡へ會釋を爲し、『貴方入らッしやい。』

水鏡はお瀧の色白く中高の美しき顏に見惚れて、此人の子だもの、元二の樣な美男も生れた筈だ。美都子の美しさが思遣られるなどと思つて居た所に、突然に挨拶をされたので周章氣味で禮を返して、

『兒玉君の友人の小川寛二と申す者です。元二君に今日お目に掛りましたが、何卒御心安く。』

『能く入らしッて下さいました。何卒、御寛座なすつて下さいまし。』

其處に元二が茶を入れて持つて來て三人へ進める。

『美都ちやんを御使ひが可いよ。』

元二は母の語には答へないで、また茶の間へ行つて茶受の菓子鉢を持つて來て、三人の間に置く。

『美都ちやんは居ないのかい。』

『僕が爲るから可いよ。』と、目で母に物を云ひながら其處に坐る。

お瀧は元二の目配は何か仔細のある事であらうと思つて、素知らぬ顏を爲ながら、

『兒玉さん、粗菓ですが、お一つ食上つて下さい。貴方も何卒。』と云つて勝彌を見返り、

『先生、お一つ取りませうか。』

『いえ、僕は今欲くありません。』と、勝彌は權二を見て、『君如何ですか。』

『難有う。』と云つて、權二は勝彌を見た眼に笑を含みながらお瀧を見返り、『久能木君には好い御土産を持つて來たんですが、つい逃げられッ了つたんです。はゝは。』

『お土産が逃げましたッて。』と、お瀧は眉を顰せて、『何樣御土産でしたの。』

元二は前に其仔細を聞知つて居るので、權二の語を聞くさへ不快を感じたのだから、母が相手にならなければ可い、早く茶の間へ引込んで了へば可いと思ふけれども、お瀧は其

土産は何だなぞと問返して居る。母さんは何故此樣に多辯なのかと、口惜い樣な氣がして居る。

『御母さん、何樣土産ッて御聞なさるんですか』と、權二はまたはゝはと笑つて、『其は須壽ちやんと云ふ美人の土産なんで、久能木君が當家に來られる前に、下宿して居られた家の娘なんです。』

『まア。』と、お瀧は驚きの眼を睜つて勝彌を見たが、直ぐに笑顏を作つて、『兒玉さん、其娘さんと途中まで御一緒だッたんですか。』

『お宅の門の前まで來たんですが、急に可厭になつたと見えて、歸つて了つたんです。』

『惜う御座んしたねえ、切角お出でだつたのに。』

權二は勝彌に對ひ、

『君に非常に逢ひたがつてね、是非連れてッて呉れろッて云ふもんだから、連れて來たんだよ。』

『さう。』と、勝彌は苦笑をする。

『君の噂を爲ない日は無いんだよ。君には隨分親切を盡して居たんだから、無理も無い。』

『まア恐入りました事ねえ。先生も中々隅には置けませんのねえ。』と、お瀧は興ありさうに笑ふ。

元二は腹立しさうに母を睨む。

『久能木君、今でも依然君を思つてるんだよ。』

『さうかね。彼女も餘程變物だね。』と苦笑をする。

『久能木君、君が其樣事を云ッて居ちや、須ちやんが可哀相だ。』と、權二は別して喋々しい語調で、『須ちやんも、君には眞箇實意を盡して居たちやアないか。其だのに、彼女も變物だ、だけちやア可哀相だね。』

お瀧は遽乎と勝彌の顏を見る。勝彌は顏も赤めないで、

『さうさ。僕の世話を能く爲て呉れたのは事實だ。僕が金に困つて、宿料を滯ほらした時なんぞも、彼母親の前を取繕つて呉れたのも事實だし、僕が世話になつた禮に金を遣つた事があつたッけが、其の金を一應は受けて置いて、それで僕に羽織を——此羽織だ、今着て

る此羽織を調へて呉れたのも事實だ。まだ他にも、種々世話して呉れた事があるから、僕は今でもお須壽には感謝してるのだ。其内に折があつたら、相當の禮を爲たいと思つて居る位だ。』と云つて、お瀧に向ひ、『御母さん、妙な女でしてね、能く僕の世話を爲て呉れたんですよ。』

お瀧が莞爾笑つて何か云はうとした時、權二は早くも口を開いた、而も嘲ける樣な調子で。

『能く世話も爲ようさ。未來の久能木夫人を以つて任じて居たんだもの。はゝは。』

『おやッ、其樣御關係が御有んなすつたんですか。』

お瀧が異樣な笑を含んだのを、元二は吃度睨んで、

『母さんは何にも知りもしないで、失敬な事を云ふには及ばないよ。』

『元二君、君が心配する事はないよ。事實は事實が證明するんだから、詮方が無いさ、』と、勝彌は高く笑ふのだ。

『それは眞箇ですよ。』と、水鏡が膝を進めて、『既に事實が事實を證明して居るんですからなア。』

『さうか。既に證明してるッて、其は何樣事なのか。』と、勝彌は屹度水鏡の顏を見る。

『其ですか。』と、水鏡はにや〳〵笑ひながち、『止しませう、僕は動もすると先生の感情を害する樣ですから。』

『君が事實を事實として話すのに、何も私の感情を害する筈が無いぢやアないか。話したまへ。』

『ぢやア、話しませうか。』と、尙は暫時躊躇つた後、『僕は此方に來る途中で、彼婦人から先生の事に就いて聞いた事があるんですよ。』

『あゝ、然樣か。面白い。其話を聞かう。』

『今兒玉君が云つた樣に、彼婦人は眞個未來の久能木令夫人を以つて任じて居たんですね。それが、先生が此所へ御轉宿なすつたもんだから、非常に失望して了つたんですね。而も失望しながら尙は斷念する事が出來なくッて、如何にかして〳〵と、頻りに煩悶いてるんですね。』

『さうか。』と、微笑みながら、『それで何か、僕と何か約してある樣な事は云はなかつたか。』

『其樣事は聞きませんでした。』

『それでは、僕が何かお須壽に云つた樣な事は云はなかつたか。』

『其樣事も云ひませんでした。』

『小川君、如何だ。事實は其通事實を證明するものなんだ。お須壽親子が、僕に彼等の身を托しようと思つたのが事實であると云ふ事と、僕が彼等に何等約した事が無いのも事實だと云ふ事が、君の話に依つて――君がお須壽から聞いた事實其に依つて證明されたのだ。僕は其事さへも、彼家を去る眞際の彼母親の愚痴を聞いて知つた位なんだ。』と、元二を見返つて、『君如何だ、世の中と云ふものは、可笑なものぢやないかね。』

元二は微笑んだが顏を赤めて、

『母さん、だから、知りもしないで口を出すものぢやアないと云ふんだよ。』

お瀧も一寸返す語が出なかつた。權二と水鏡とは何を爲に態々來たのか、自分ながら分らない樣な氣がして居る。

茶の間に耳を澄まして、座敷の談話を聞いて居た千代乃は、此時美都子を見返り、叫く樣な小聲で、

『美都子や、お前座敷の話をお聞きだッたらうね。』

美都子は聞いて居たとも居なかつたとも答へないで、唯祖母の顏を目成つた。

『話してお居での樣子でも、其人の氣象は大概知れるものなんだよ。先生と兒玉さんと比較べて御覽な、宛然一緒にはならないのだよ。先生はお思ひなすつた事でも、爲すつた事でも、些とも隱さないで、其は斯う彼は如何ッて云つてお丁ひなさるんだよ。あれがさね、何でも無い事の樣で、大概な人には出來ない事なんだよ。父さんの處に來る人も、隨分澤山あつたでせう、叔父さんの御友達も、隨分遊にお入來だつたでせう、兄さんの友達も澤山あつたけれども、先生見たいな方は、一人だッてありはしないんだよ。』

千代乃が斯う云つて美都子を見ると、美都子は瞬もしないで凝乎と見て居る。

『私はね、』と、また美都子の顏を見て、『兄さんやお前の前途が如何お成りかと思つてね、

それはもう實に心配して居たんだよ。父さんは彼通だし、母さんだッて心の動き易い人なんだから、私は獨で心細がつて居たんだよ。如何かして、お前達の行末を頼む樣な人が、以前の家來筋の人か親類の中に有て呉れば可と思ふから、隨分心掛て探して居たけれども、此人はッて人は滅多にあるものではなしさね、私は實に心細かつたんだよ。私は然樣思ふんだよ。兄さんが不圖した事から先生と御懇意にお成りだッたのは、何か因緣ぢやアないか知らと思ふんだよ。實に兄さんやお前が仕合なのさね。先生にお頼み申して置けば、私は明日が日死去つたッても安心だと思ふんだよ。美都子や、お前ね、今夜私が云つて置く事を、決してお忘れでないよ。』

美都子は點頭く樣に頭を下げながら千代乃を見る。

『永い中には種々な事が有ものだからね。』と、呟く樣な低聲ながら力の籠つた語調で、『先生と父さんや母さんが仲違をお爲の事もあらうし、兄さんとだッて互に不快にお成りの事が無いとも限らないけれども……美都子や、お前だけはね、何樣事が發ッたッても、先生に對して、決して態度をお變へでないよ。私はね、お前に強て先生のお氣に入る樣にお爲とは云はないけれども、始終同じ心持でね、決して變つた態度なんぞお爲でないよ。父さんや母さんは駄目だし、叔父さんは尙更だし、先生と兄さんより外にお前の頼る人は無いんだよ。い丶かい、お解りだッたらうね。』

美都子は千代乃の語の央から垂頭き加減になッて居たが、此時乾度顏を上げ、眼の潤に洋燈の火影を宿しながら、小さな聲で唯と答へた。

千代乃は首肯きながら、『決してお忘れでないよ。』

『美都ちやん〳〵。』

突如に座敷から呼んだのは權二だ。

『何か御用ですか。』

千代乃が代つて答へた。

『御祖母さんは其處にお居でだッたんですか。まだ御挨拶も爲ないで失敬して居ました。』

權二は之を機に茶の間へ行く。水鏡はもと〳〵美都子を見たいのが本願であるから、權二の後に尾いて茶の間へ行つて見たいのだが、權二が來いとも云はないのに、有繋に無遠

慮には推掛けかねて、むづ〳〵して居たが、

『柏木君、便所を拜借したいんですが。』

『便所ですか。其障子を開けると縁側の突當です。』

茶の間へ行く機會の一つにもと、便所を借りようとしたのであるが、座敷の縁側の突當と云ふのに一方ならず失望しながらも、今更行かぬ譯にはゆかず、權二が明放して置いた隔の唐紙の間から、ちらとでもとの希望を懷きながら立上ると、生憎にも元二が直ぐ傍の障子を開けて呉れたので、またもや失望しながら便所へと辿るのであつた。

水鏡は滿らない顏を爲て便所から歸つて來て、元の坐に坐つたが、勝彌もお濠も元二も眞面目な顏を爲て居て何も云はぬから、何となく所在がなくつて、權二が茶の間から來て呉れゝば可いともぢ〳〵して居る。

『小川君。』と、勝彌は呼掛けて、『君が宅を出る時に、紫痩君は居たかね。』

『はい、お居でゞした。』

『相變らず勉强だらうね。』

『紫痩先生ですか。』と、嘲ける樣な笑を浮べて、『勉强なさるどこの騒ぢやありませんです。』

『何か始つたんかね。』と、眉を顰せる。

『始つたどこぢやないです。先生、貴方が御辭去なすつてから——先生が居らッしやる中から其徵候はあつたんですがね——紫痩先生と奥さんと衝突なすつて、先刻兒玉君が、僕を誘引に來て呉れた時も、奥さんの火の手が、まだ中々盛だつたんです。』

『さうかねえ。困つたもんだね。君が宅を出る時迄も、尙だ爭つて居たのかね。』

『さうです。僕は玄關から聞いてたんですが、面白いと思つて筆記して見たんですよ……尤も、時々先生が聲を小さくなさるんで聞取れなかつた處もあるんですが、出來るだけ忠實に筆記した積です。はゝは。』と、白い齒を見せて笑ふ。

勝彌は苦々しく思ひながら、

『私が居た中から其徵候があつたと云ふのなら、紫痩君がつい口を滑らした、經驗の爲になら人の夫ともなると云つた、彼の一條からだらう。』

『さうです、〳〵。』

『あれは紫瘦君が悪い。併し、妻君も亦、大概に爲て置く方が可いだらうに。』

『先生の方が始終受太刀でしてね、はゝは……筆記を持つて來てると、お目に掛けるんですが。』

『いや見たい事もないが……君は其筆記を、何にする意か。』

『何にするッて事も無いですが、他日或は用ゆる場合もあらうかと思ふんです。何か描いて見る時にですね。』

『さうか。君の樣な男を玄關に養つて置く、紫瘦君は幸福だよ。』

水鏡は俄かに氣付いたらしく周章ながら、

『先生、僕が筆記したッて事は、宅の先生には何卒內證に願ひますよ。』

勝彌は唯笑つて居て何とも云はない。何とも云はないだけに、水鏡は一層氣味が惡くなつて來た。

『先生、何卒お話が出ない樣に願ひますよ。』

『其樣に心配しなくも可いだらう。君の派の人には、其位な事は何でもない筈ぢやないか、況て紫瘦君なんぞは――無論人眞似ではあるが――經驗以外には筆を着けんと云つてるんだから、君がまた紫瘦君を眞似てるものとしたら、紫瘦君は喜ばんければならない筈だ。だから、君の筆記にしても、經驗を忘れない爲である、後日になつてからだと唯回想するだけで、到底其時の感想其儘を得られるものでないから、筆記して見たのですと辯解したら、紫瘦君は如何も爲る事が出來まいぢやアないか。』

『ですけれども、眞逆に其樣事も云へんですし、僕が困るですから內證に願ひたいですよ。』

勝彌がまた高く笑つた時、權二が不平らしい顏を爲ながら茶の間から出て來た。

『小川君、そろ〳〵行かうぢやないかね。』

『さうかい。』と、水鏡は終に美都子を見る事が出來ないかと頗る物足ない。

『久能木君、須ちやんが待つてるから、些と遊に來て遣つて呉れたまへ。阿母さん、御邪魔でした。元二君、明日能かつたら來ないか。』

『難有う。』

誰も止めないので、水鏡はしぶしぶ樫二に從いて柏木を辭した。

二人は門の外へ出ると、申合せた樣に同時に、

『滿らんかつたね。』

樫二が頻りに千代乃を罵れば、水鏡は美都子を見なかつた不平たらたらだ。

（三二）

長夫は姉夫婦に對しては始終不快の念を懷いて居て、今日の樣に同居して居る氣は無いのだけれども、止むを得ず耐忍に耐忍して居た意である。それに、元二までが、此頃は動もすれば口答を爲るのが癪に障る。其上、久能木と云ふ奴がのたくりこんで、先生樣として崇め奉られて、君子然たる口氣で意見がましい事を云ふ、此がまた酷く癪に障る。何時も偶ばれるのは、千代乃と美都子と三人で別家になつて居て、我儘の仕放題を爲て居た時の事だ。

今でも別家にさへなれば其が出來るのだから、百圓の金を無理にも手に入れて、其希望を遂げたくてならなかつたのだ。所が、其が意の如く運ばないで、義母の千代乃までが別家には異議を唱る、久能木迄が入らざる口出を爲る、癪に障つて〳〵溜らないから、千代乃に對しては威嚇半分で家を飛出して見たのである。

けれども、飛出して見ると、一町とは歩まない中に滿らなくなつて來た。義母が呼止めた時引返して、其からまた駄々をこねて、今一度捻返すのであつたものをと思つて見たが、飛出した時の自分の見脈を顧ると、今更のめ〳〵と歸るのは見識を下げる樣で、一同から墨下まれる樣で、男が一旦飛出して置いて其樣意氣地の無い事が出來るものか。二三日姿を見せなかつたら、いや今夜一晩歸らなかつたら、義母が大騒を爲て、明日は銀行や友人の家へ人を派して探すに違ひない。其處で、探されて遭つて、連れて歸られて遭つて、また捻返して遭らう。それだ〳〵、其でこそ乃公の希望も遂げられるのだと、俄かに勢づいて大通へ出たが、何處へ行つたものかと暫時其方向に迷つて居た。

突如飛出したのだから、紙入は素より錢入さへ持て居ない。電車賃も無きや、煙草を買ふ

錢も無い。満らない事を爲たものだと、我ながら嘲けりたい樣な氣がして、暫時は佇立んだまゝ電車を見送り見迎へて居た。

如何考へても、今直ぐ宅に歸るのは、餘り意氣地無過ぎる。日曜日ではあり、何人か一人位は家に居るだらうと、てく〳〵歩きの青山から原宿、三度目の澁谷の羽澤で、辛と落合と云ふ同僚が宅に在たのを訪ね當てゝ、煙草にも飛付く樣にして有付き、夕飯も其家で馳走になり、夜に入つても悠々と話込んで、十時の時計を聞いて始めて其處を辭した。

家外へ出ると、冴えた月明に足下は便が可いけれども、身に浸みる樣に風が寒い。青山の墓地から練兵場を突斷れば、信濃町まで一直線で、無論路程が近いから然樣したいとは思ふけれども、電車が運轉し始めてから、夜に入つては殆んど人通が無いので氣味が惡い。阿容阿容と霞町から六本木、御所前と大迂回を爲て、辛つと船町の我家近くへ來たのは、十一時近い頃だ。

門前まで來て、内の樣子を窺ふと、如何やら幽かに話聲が聞こえる樣だ。

『みんなが起きてちやばつが惡いなア。』

頭を搔き〳〵佇立んで居ると、格子戸の開いた音に續いて足音が聞こえる。

『何人だらう。元二の樣だ。元二ぢや、癪だからなア。』

門の締を爲に來たらしく鍵金を掛ける音がするので、長夫は溜らなくなつて石段を駈上り、耳門に手を掛て開けようとしたが既う開かない。

『おい。』

『誰だ。』と、内から誰何したのは果して元二だッた。

『私だ。』

『私ッて誰なんだ。』

『私で分らないのか。長夫だよ。』

『長夫ッて……。ふむ、叔父さんか。開ければ開くんだよ。』

元二が家の方へ行く足音がする。

長夫が耳門を開けると、餘り入れ過ぎた力にあまされて、倒れ樣としてしがみついた途端に脱れた耳門と共に、中へ轉込んだ。

耳門の脱れた音と長夫の叫んだ聲とに、家内に居たものは吃驚いて、先づ第一に玄關に出て來たのは勝彌だ。續いてお瀧と重勝も出て來た。美都子も父の後に從うて居た。

『元二君、如何したのか。』

『なに、何でも無いんです。叔父さんが、耳門の戸と一緒に轉込んだんです。』

『長夫君が歸られたんだね……長夫君、怪我を爲やせんですか。』

長夫は此時辛つと起上つたが、傍に立つて居る元二を見るより、拳を振上げて打も掛らん擬勢を示し、

『元二、失敬ぢやないか。』

『何がです。』と、元二は一歩進んで、『僕を打るんですか。』

『貴樣の樣な失敬な奴は、打ッて遣るんだ。』

『打る。さア、打ッて見るが可い。』と、元二はまた一歩進みながら、『失敬だ〳〵ッて云ふが、僕が何樣失敬な事を爲たんだ。』

『爲たとも。現に今爲たぢやアないか。』と、有繋に打掛りは爲ないけれども、耳門戸を振上げた樣子で、『乃公が戸を開けようとすると、押へて居やアがつて、開くから開けろつて云ふから開けると、突如に手を放しやアがッて、其機勢に戸が脱れて、』

『そりや間違つてる。叔父さんの邪推なんだ。僕が掛金を掛けた時、叔父さんが開けようとしたから開かなかつたんだ。誰が押へてなんぞ居るもんか。それから掛金を脱して、さアお開けなさいて云ッたら、僕が押へてるなんて邪推してるから、力一杯に開けたんでせう。だから、戸が脱れたり轉がつたりしたんぢやアないか。邪推したから其樣事になつたんだ。僕の知つた事ッぢやアない。それでも打らうてんなら、打られるから打ッて見るが可い。』

元二に斯う云はれると、長夫はさうかも知れないとも思ふ。で、稍拍子抜がしながらも尙ほ戸を振上げたを卸さず、

『其なら其と、何故云はないんだ。靜かに開けろッて注意をするが可いんだ。叔父に對する禮を知つてるなら、開けて呉れるのが當然ぢやアないか。』

『はア、然樣ですか。どうも大いに不注意でした。』

『馬鹿にするな。』

『何時馬鹿に爲た。』と、元二がまた一歩歩み寄る。

勝彌は玄關から月明に二人の態度を見て居たが、此時突と家外へ出て、其間を押隔てた。

『元二君、叔父さんに反抗しちや不可い……長夫君、君もゝう勘辨しちや如何です。戸は僕に與したまへ。』

勝彌が戸に手を掛けると、長夫は爲すがまゝに手を放す。

『元二君、戸を箝めて、締を爲て了ふが可いよ。』

元二は不平だけれども、勝彌から戸を受取り門の方へと行く。

長夫が元二を見返つて、尙ほ失禮な奴〳〵と呟くのを、勝彌は態と長夫の腕を抱える樣にして、兎角して座敷へ伴つた。尤も、重勝夫婦と美都子とは、元二が戸を門に箝めに行つた時、既に茶の間に復つたのだ。

『長夫君、怪我がなくて可かつたですな……それに、能く今夜歸つて下すつたですな。僕は君と充分御相談したい事があるんですが、君も感情からばかりでなく、自分の利害、柏木家の利害なぞも考へて見て、遠慮の無いところを云つて貰はんきやならないんですよ。』

長夫は入らざる事をと云はぬばかりの顏に、冷かな笑さへ浮べて居る。

其處に元二が入つて來て坐らうとしたのを、勝彌は屹度見上げて、

『君は茶の間へ行てゝ呉たまへ。』

『さうですか。』と、不平さうに座敷を出て行つた。

『長夫君、既に御祖母さんを始め一同さんの御同意を得たんですがなア、君も今御話する僕の意見に贊成して下さらんですか。』

勝彌が斯う云ふと、長夫は澄さぬ顏を爲ながら、

『君の意見て、何樣意見です。よし母が同意しようが、何人が同意しようが、僕が可厭だと思ふ事なら、斷じて反對します。それで可きやア話したまへ。』

千代乃が勝彌と長夫に進める茶を自分で持つて來て、

『長夫や、お前さん何ですよ。先生はね、お前さんの爲だの、此家の爲だのを思つて下すつて、御親切に仰有つて下さるんですからね、お前さんも能くお考へるが可いんだよ。先生の仰有るのにはね、』と云ひ掛けて、勝彌の樣子を見る。

『御祖母さんから御話下さつても、宜しいのです。』

『それでは私から。』

長夫は千代乃の云掛けた語を遮り、

『私は、御母さんと美都子と三人で、別に家を持つッて事を土臺にしてなら。』

『まア お聞き。』と、支へて、『お前さんも、自分の我儘を通さうなんて思はないでお聞き。』

千代乃は二百圓は銀行に預けて置いて、何人も手を着けずに、急場の準備にして置く事と一家の生活を支へる爲に、勝彌が過分の出金を仕て呉れる事、就ては長夫も其の月給を納れる事、二人の分を土臺にして、其上の不足は重勝が出來るだけ稼いで補ふ事、斯うしたなら、各自責任を負つた共同生活とも云ふ可きもので、互に相扶け相勵し、平和な家庭を作つて行つたら、此上の幸福はなからうと思ふと、自分の所思をも加へて話を爲た。

長夫は鼻頭で應ひ、

『私が何だッて月給を出さなきやならないんだ　』

千代乃は長夫も多少は考へた上で返辭をするだらうと思つて居たのに、直ぐと如此だから有繋に呆れて、何とも語が出ないのである。

勝彌は微笑みながら、

『長夫君、君が御母さんと君とを養ふんだと思つたら、何も怪むべき事ではないでせう。』

『私が母さんを養ふ。私一人で。』

『さう。君一人で養ふのだと思つても可し、君と元二君の御父さんと、僕と三人で養ふのだと思つても可し、其は何方でも可いだらうと思ふんです。』

長夫は佛頂面を爲ながら默つて居る。

『長夫君、君は別家になれば御母さんを養ふか、其でなきやア否だと云ふんですか。』

『君が其樣事を聞いて、何にするんだ。君と私とは何等の交渉も無いんだ。』

『君がさう云へば其迄です。僕も斯して一家に住んで居て見れば、君方が平和で幸福で居られる事を望むから、善後策を講じて見たんだが、貴樣なぞは何の關係もないから、口を出すなと云はるれば其迄なんだ。』

『まア 何と云ふ事でせう。長夫、お前はね。』

千代乃は膝を進めて、屹度長夫を見据ゑた。

『長夫、お前は先生が彼樣に御親切に云つて下さるのに。』

『親切かも知れないが、何も久能木君が我々の事に干渉しなくても可いんだ。私の事は私が爲るんだから、他人が口を出すには及ばないんだ。』と、長夫は久能木を嘲ける樣に見て、

『久能木君、以來僕や母の事に就いて、口を出さない樣に爲て呉れたまへ。』

『よろしい。』と、勝彌は微笑を含みながら洋燈の火を見て居る。

『先生、何とも申上げ樣が御在ません。此樣に沒分曉い人ではないと思つてましたけれども……もう私も關はない積で御在ます。自分の事は自分でするッて云つてますから、勝手に爲るが能う御在ますのさ。』

千代乃が斯う云つても、長夫は嘲ける樣な笑を浮べて何にも云はぬ。

『自分の事は自分で爲る、此樣立派な事は無いんですから、長夫君が此心を以つて、萬事に處せらるゝのは、喜ぶ可き事だと思ひます。僕は長夫君とは何の交渉もないんですから、以來口出は爲ない事にします。』

勝彌が斯う云つて机に向つたので、千代乃は氣の毒で堪らないけれども、何と爲ようもない。

『長夫、彼方へお行でなさい。』

千代乃が茶の間に入ると、長夫も其後に尾いて行つた。茶の間には重勝夫婦元二兄妹が火鉢を中に膝を集めて居たが、長夫に對つて誰一人何とも云はぬ。長夫も俯頂面を一入むづかしくして何とも云はない。

『親子兄弟斯う爲て居たつても、心が別々なほど淋しい事は無いね。』

千代乃が辛さうに斯う云ふと、美都子は胸が迫る樣で、臺所へ立つて行く。元二も座敷へ行つて了ふと、後は四人が睨合つて居て、何にも云ふものが無いから、一層淋しい感じがする。

重勝は不圖時計を見上げて、

『おゝ、もう十二時だ。明朝は早く出掛けなきやアならない。お濱、寢る樣に爲て貰はう。』

『美都ちやん〳〵。』

お瀧が呼ぶので、美都子は臺所から出て來た。其眼には尙ほ潤が見える。

『父さんの御床を伸べて上げてお呉れ。』

『はい。』と、押入の唐紙を開ける。

『叔父さんのも取つて貰ふんだ。』

『さう。』

美都子は軈て二人の床の外に、祖母と母と自分の分までも伸べ了つて、勝彌や兄のは如何したら可いのかと思ひながら座敷を差覗くと、二人とも机に對つて、書を讀んで居るのでも書いて居るのでもなく、むづかしい顏を爲て居た。

『兄さん、先生のお床は。』

『僕が取るから、僕のも一緒に、其處に出して置けばいゝよ。』

『さう。』

『何時ですか。』

勝彌は美都子の愁を帶びた顏を見ると、何とも云はれないほど氣の毒で、家内の紛紜に泣く樣な境界から、一日も早く救つて遣りたいと思ふ心が、胸に溢れる。

『今十二時を報つとこで御在ます。』

『さうですか。元二君、寢ようぢやアないか。』

『さうしませう。』

三人で二人の床を敷く。茶の間と座敷の唐紙が閉ざゝれると、軈て臺所の方に鼠のあれる音が聞こえる。

其翌日も長夫は銀行に出勤しない意なのか、九時過になつても茶の間の隅に寢て居た。千代乃が氣を揉んで、美都子とかはる〴〵幾度呼覺したか知れなかつたが、宛然死人の樣で返辭さへ爲ないのだ。

勝彌は昨日からの事が何となく面白くない。自分が提出した善後策が、結局用ゐられなかつたのが面白くないばかりでなく、一家の面も同胞同樣の人々の間にも、金錢の事になれば斯くも心が汚ないものであるかと思ふと、自分迄が塵に塗れて居る樣な氣がして不快だ。

此樣家庭の中に長く居たら、自分までも全然此種類の人に墮して了やしないかと怖ろしい。けれども、乃公は大丈夫だ、乃公は何樣汚れた空氣の中に住でたつて、それに中毒する樣な意志の薄弱な男ぢやないんだ。一生此家に居たッて、乃公は長夫見たいな男に成りはしない。と直ぐに思返して、それに、乃公が去つたら第一美都子の前途が案じられる。此樣家庭に今の樣にして居るとして、其將に來たらんとする運命の悲慘なるべきは云ふまでもないでは無いか。祖母さんは其を氣遣へばこそ、其の保護を乃公に依賴されたんではないか。乃公は其を受合ふとまでは云はなかつたけれども、此家に轉宿つてからの乃公の心は、如何なる事があらうとも、必ず美都子を保護する、保護せねばならぬと既に誓つたのではないか。此位な事で、美都子を捨てなるものではない。乃公は美都子を救ひ得るまでは、何時迄も此家を去るのでは無かつた。其叔父が彼樣くだらない男だからと云つて、それが美都子に何である。母なる人の氣質が面白くないからと云つて、それが美都子の罪でも何でも無いではないか。乃公は今また更めて誓ふ、如何なる事が起らうとも、一旦美都子を救はうと決した此心を變ない。美都子は乃公の生命ではないか。其生命を捨てたら乃公が無いんだ。

乃公は誓つて美都子を保護する。乃公は今此家を去るべきでは無い。美都子と共に成る樣に成るんだ。

勝彌は斯う思返しはしたものゝ、野外の清い風に吹れて、心を新にしたい樣な氣がしたので、元二を誘つて船町の家を出た。

長夫が眼を覺したのは十一時近くだ。それも直ぐに起きようとはせず、美都子をして蓐盆を枕頭に運來らしめ、悠々として蓐を吹かしなどして、まつたく床を離れたのは十二時を報つてからだつた。

『美都子、床を畳んでお呉れ……湯はあるだらうね。』

『今頃お起きだッて、御湯があるものかね。』

千代乃が答へると、長夫はもう佛頂面を爲た。

『何時起きたッて、一杯の湯位殘して置いて呉れたッて可いんだ。』

『今日は其樣に寒かァないし、それに午後ぢやァないかね。水で我慢してお呉れ。』とは云つたが、煮立つて居た鐵瓶を取つて出して遣り、『これでも持つてお行で。』

長夫は不承々々に鐵瓶を提げて臺所へ行つて了ふ。

長夫の寢具を藏つて火鉢の傍に來た美都子を、千代乃は凝乎と見ながら、

『我儘な人達ばかしで、御祖母さんはほッとして了ふよ。』

美都子は伏目になつて

『叔父さんにはもう、何にもお云ひなさらない方が可くッてよ。』

『さうも思ふけれども、久能木さんにだッて耻かしいちやないかね。如何したものかと思つて、御祖母さんは實に當惑つて了ふよ。』

美都子は慰めかねて默つて居ると、軈て長夫が空の鐵瓶を提げて入つて來た。

（二二三）

美都子が膳立をして進めると、長夫は箸を取りながら座敷を見返り、

『美都子、久能木は留守なんかい。』

『え丶。』

美都子は祖母の顏を見る。

『久能木だなんて、呼捨にお爲でないよ。私だッて、姉さんだッて、先生て呼んでるぢやアないかね。』

『なにが先生だらう。先生て呼ばれる資格が何處にあるだらう。母さんや姉さんが先生なんて奉つるもんだから、好氣になりやアがつて不用る口出を爲るんだ。彼樣書生を先生だなんて、馬鹿〳〵しいや。』

『だつてお前さん、何か丶能くお出來で、元二を引立つて、』

『元二は然樣かも知れないさ。だから、元二は先生と尊敬するが可んだ。』

『いえ、私も尊敬しますよ。お前さんがね、久能木先生のせめて半分だけの思慮を有つてお呉れだとね、私は此樣に心配はしないんだよ。』

長夫は鼻頭でふんと笑ふ。千代乃が長夫を凝乎と見た眉には皺が寄る。美都子は傍に見聞して居るのが可厭で勝手へ行く。

『叔父さんは何故彼樣だらう。御祖母さまは氣が休まる間がないは。』
美都子は斯う呟いて、竈の前に徒空然と佇つて居た。暫時すると祖母の泣聲で何か云つてるのが聞こえた。
『御祖母さまもお止しなされば可いのに。叔父さんにいくらお云ひなすつたつて駄目。』
斯う云つて水口の腰高障子を開けると、母のお瀧が鐵三を紐で背負ひながら日光を滿身に浴びて、頻りに洗濯を爲て居たのである。お瀧が手を動かす都度に、肩から落ちさうに見える鐵三の睡つた頭が、ぐら〳〵と動搖られて居る。
美都子は駈出して行つて、
『母樣、洗濯は私が代りますから、暫時お休みなさるが可いは。』
『なに私が爲るよ、もう直きなんだから、』
『だつて、鐵坊が可哀相ですは。頭に日光が當つてるのに、ぐら〳〵搖動れてるんですもの。腦病にお成りだと大變よ。』
『大丈夫だよ。』と、手を止めて見上げて、
『叔父さんは尙だ寢てお居でなの。』
『い丶え、今御膳よ。』
『彼人にも實に困るぢやないかねえ。池田から返つたお金で何か商法でも爲て、お前にも流行の着物でも調へて遣りたいと思つてるのに。』
『私着物なんぞ欲しかありませんは。それよりかも矢張、先生の仰有る樣に銀行に預けといて、何かあつた時の用に爲すつた方が可かァなくつて。』
『だつて、利子だつて幾許も附きやァしない銀行なんか、本當に滿らないんだよ。』
『だつて、無くなる事はありませんでう。』
『それは然樣さね。』
お瀧は暫時默つて居たが、
『それに、他人は入つて來るし、方々から口が出るもんだから、本當に遣切れやァしない。』
と、獨語の樣に云つてほつと息を吐く。
母さんも亦叔父さん同樣先生を厭つて居られるのか。先生は此樣に何人からでも厭がれ

る方なのか知ら。御祖母さまは先生が宅に來て下すつたのを、大變に幸福の樣に云つてお居でなさる。それを、母さんと叔父さんは邪魔者でも來たかの樣にお云ひなさる。私には御祖母さんのお云ひなさる方が可いか、母さんや叔父さんの方が不可いのか、其樣事は分らないけれども、先生がお云ひなすつたり爲すつたり爲さる事が惡いとは思はれない。私は御祖母さまの爲さる通に如何でも成る意だから、何も考へるには及ばないのだけれども、それでも考へて置かなきやアならない樣な氣が爲る。私は如何考へたら可いのか知らと、美都子は茶の間の祖母と叔父との談話の成行をも氣遣ひ、佛樣の樣に無邪氣な鐵三の寢顏を、羨ましさうに見ながら考へて居た。

『美都ちやん、』と、お瀧は洗濯の手を止めて見上げながら、『お前はね、宅が今見たいでも可いッてお思ひなの。』

『今見たいて、何がですの。』

『何がッてお前、お前が毎日見てお居での通ぢやアないかね。父さんは定つた收入があるんぢやアなし、兄さんは未だ收入どこの話ぢやアなしさ。叔父さんは自分さへ善きやア可いッて人なんだから、當にはならないしさ。考へると可厭になるんぢやアないかね。』と、また見上げて。『お前は如何お思ひなの。』

『私だつて心配して居ますは。』

『ぢやア、今見たいぢや不可いてお思ひなんだね。』

美都子は默つて居たけれども、母に見られたので點頭いた。

『お前が然樣思つてお居でなら、相談があるんだよ。』

『相談て。』

お瀧は汚れた盥の水を捨てゝ、バケツから清い水を注掛けながら、

『お前ね、父さんや母さんを、今一度世に出してお呉れでないか。』

『私が。』と、美都子は自分に其樣力があらうとは思はないから、合點がゆきかねて眼を睜つて居る。

『お前でなきやア、到底私達を再び世に出して呉れる事は出來ないんだよ。』

『母さま、私如何すれば可いッて仰有るんですか。』と、見上げて居る母の顏を見下す。

『如何ッて、あのう、それ、あのう清水さんね――清水の隱居さんね。』

『え、。』と顏色を變へる。

『お前が、彼の隱居さんの養女になつてお吳れだとね、父さんが長谷さんと計劃して居らッしやる事業に掛れるんだよ。彼の事業さへ計劃通に運んで吳れゝば、一年と過ない中に、以前通の財産が出來る事になるんだよ。さうなれば、父さんや母さんは素りだし、御祖母さまだッて安心なさるしね、兄さんだッて復學校へ通へる事になるんだよ。美都ちやん、お前の奮發一つで其樣になるんだよ。養女だとッて、緣を切つて遣るんぢやアなし、始終往復が出來るんだから、些とも淋しい事なんかありやアしないんだよ。美都ちやん、お前本當に奮發してお吳れでないか。ねえ美都ちやん、柏木一家を興すのも亡すのも、お前の心一つにあるんだよ。如何かね。お解りかね。本當に能く考へて見てお吳れよ。』

美都子は清水の隱居と聞くだけでも、慄然とするほど可厭なんだ。何故に可厭だと思ふ樣になつたかは、自分にも能くは解らないけれども、祖母の千代乃が厭ふだけでゝも可厭なんだ。父や母が其故に世に出ると云ふのは望ましいけれども、先方の樣子さへ長谷の口から聞いたゞけなんだ。それが果して虛か實かさへ分らぬ。長谷が第一面白からぬ男で、祖母も厭つて居れば、自分も厭ひなんだ。其男の口に乘て、迂濶先方へ行つてから後悔する樣な事でもあると、それこそ自分の破滅になるんだ。祖母が最初から此事に不同意なのは、同意が出來ないと見られたからであらう。自分の樣な幼い眼では物を深く見る事が出來ないけれども、祖母の經驗を積だ心には、何事も其底の底まで見透せるのであらう。況て深く自分を愛して下さる點から推しても、自分の爲に善い事なら、進んでも同意なさらうのに、さうでないのは不善いからに定つて居る。父や母より祖母の心が自分の心だから、母にたりとも迂濶な返事は出來ぬと、母に眼を合せない樣に垂頭いて默つて居る。

『美都ちやん、母さんが此樣に頼んでも否なのかい。』

お瀧が答を促した時、水口から聲を掛けたのは千代乃だ。

『美都子や、母さんの方に御用が無きやア、鳥渡來てお吳れ。』

千代乃が聲を掛けると、美都子はお瀧の顏色を窺ひながら、

『御祖母さまが呼んでらつしやるから、行つても能う御座んすか。』

『可いけれどもね。』と、意味ありさうに凝乎と見上げながら小聲で、『私が今云つた事を、御祖母さまに話しでないよ。』

美都子は首肯いて見せて、

『ちやァ行つてよ。』

千代乃は美都子が此方へ來るのを見ると、直ぐに茶の間へ歸つて行く。

美都子も祖母の後から茶の間へ行くと、長夫は疾に食事を了つた樣子で、新聞紙を讀んで居た。

『美都子や、お前御苦勞だがね、叔父さんの此端書を投函て來てお呉れ。』

『はい。』

美都子は千代乃から端方を受取り、宛名を見ると、銀行の長夫の同僚の名だから、今日の缺勤を斷の手紙だと思ひながら玄關へ出て行くと、何故か長夫が尾いて來て、囁く樣な小聲で、

『美都ちやん、お前叔父さんと一緒に別に居るのは可厭なんかい。』

美都子は叔父が何で此樣事を云ふのかと呆れて、唯眼を瞬るのみだ。

『御祖母さまと私とお前と、三人一緒に住んでた事があつたちやァないか。お前忘れは爲ないだらう。叔父さんはまた三人で住みたいんだよ。お前も可厭ぢやないんだらう。さうなれば、叔父さんはお前の好きな物を何でも買つて遣る意だ。美都ちやん、お前それでも可厭なのかい。』

美都子は依然眼を瞬つたまゝ返辭をせぬ。

『お前が叔父さんと別に居た方が好いと思つてだよ、そして御祖母さんに是非然樣して下さいッて云へば、御祖母さんが屹度承知お爲なんだよ。美都ちやん、叔父さんは蝙蝠傘でも下駄でも指環でも、お前の好きな物を何でも買つて遣るんだぜ。』

『御祖母さまは如何云つてらしッて。』

『御祖母さんかい……御祖母さんはお前次第なんだ。』

『私も御祖母さま次第ですは。御母祖さまとなら何處へでも行つてよ。』

『だから、お前が勸めてお呉れつて云ふんだ。』

『私から云ふのは否。』

美都子は斯う云捨て、ついと玄關を出て行つた。

『爲樣が無いなア、まだまるで子供だ。』と、長夫は苦笑を爲ながら、『御母さんが、お前と二人なら別家になつても可いッて云ふけれども、御母さんと二人ッきりで何が樂いものか。美都子が一緒でなきやア、別家になる甲斐がありやアしない。詮方が無いから、當分現狀維持とするかなア。だけれど、滿らないなア。』

長夫がぶつ〳〵云ひながら茶の間に來ると、千代乃は、眉を顰めて居た眼に見て、

『美都子に何か用がおありだッたかえ。』

『なアに。』とばかりで、煩援さうに新聞紙を手に取る。

『先刻お云ひのことは、屹度守つてお呉れだらうね。お前が其氣になつてお呉れたと、久能木さんの思惑だッて、何樣に好いか知れないんだよ。私は勿論嬉しいし、姉さんだッて恩にお被ですよ。』

『小遣までも出せッて云はれちや困るけれども、出來るだけ入金る事に爲る積です。』

『固く守つて下さいよ。』

長夫は煩援さうに首肯く。

『先生に話したら、何樣にお喜びだか知れないよ。先生は眞個親切な方なんだから、お前も此から何かに付けて相談お爲が可いよ。』

長夫は無意識に首肯いて居ると云ふ風だ。

臺所に足音のするのはお瀧が洗濯を濟して來のであらうが、其と同時に門内にも二三人の足音が聞こえて、大きな聲を爲たのは元二だ。

『おや、もう先生や元二は御歸なんかねえ、十二社か雜司ヶ谷あたりへ、散歩に行くッて御出掛だッたのに。』

千代乃が不審さうに呟く間に座敷に入つて來たのは勝彌と元二で、勝彌は茶の間を差覗きながら、

『散歩も滿らなくなつたから、途中から歸つて來ました。』

『何處まで行らッしやいまして。』

千代乃が微笑みながら問うた時美都子が入つて來て、一抱もある紙袋を祖母の前に置いて、

『先生の御土産ですッて。』

『まア澤山に……能くお禮をお云ひが可いよ。』

座敷から元二が、

『美都子、一人で食べッ丁ふと承知しないぞ。兄さんが青山からえッちらおッちら、汗になッて持つて來んだから、兄さんに最も權利があるんだぞ。』

『元二君が云ふのは虚構ですから、一個だッて分けて遣つちゃ不可ですよ。』

勝彌が美都子を見て笑ふと、美都子は顔を赧くして唯頭を下げる。お瀧も笑ひながら、

『兄さんは食物には執念深くッて、復讐が可怖いから、其中から盆に分けて、お茶を添へて持つてッてお上げ。また寝言に迄も云はれちゃア。可厭ちやアないかね。』

『戯言云つちやア不可い。誰が其樣事を寝言に云ふもんか。』

『君の事だから云ふかも知れない。』

勝彌が元二を見返つて笑ふと、千代乃もお瀧も笑ふ。唯長夫が澄した顔をして、面も騒々しいと云ひたさうだ。

『長夫君、今日は銀行はお休ですか。』

『銀行は休ちやアない、僕の休業なんです。』と云つた語調が嘲ひかの樣に聞える。

『はゝはゝゝゝ。』

勝彌が態と高く笑つて机の前に行つて坐ると、千代乃が直ぐに座敷に入つて來て、今朝とは違つて伸々した語調で、顔に微笑さへ浮べて

『長夫も昨夜は失禮な事を申して居たんですが、今日私から能く話しますとね、辛と先生の御親切が解りましたと見えますよ。先生の仰有る通にして、一家樂く暮したいと申しますんですよ。』

勝彌は覺えず笑顔になつて、

『さうですか。それは結構です。長夫君が同意して下さると、事は決するのです。僕も此で安心しました。』

『それと申しますのも、先生の御親切に感じたからで御在ますから、全然先生の御蔭で御在ます。』

『いえ、僕の力ぢやありません。兎に角結構です。』

美都子は盆に煎餅を山盛にして持つて來、次いで茶を運んで來た。

『長夫君、』と、勝彌は座敷から磬を掛けた。『茶が來たですが、此處へ來て下さらないか。種々お話があるんですよ。』

『長夫、此方へ來て御仲間入をお爲なさい。』

長夫は心中面白からず思ひながら座敷へ來ると、坐るが早いか先づ煎餅を摑んで口へ持つて行く。

『先生に御話爲たからね、お前も先刻お云ひの通、必ず約束を守るんですよ。』

『其樣御懸念は入らんでせう。長夫君が一旦約束されたら僕は其を疑ひたくありません。』

と、長夫に對ひ、『長夫君、君の今日が君の力量の極限ぢやないんでせう。今後無限に發展しようと云ふ希望がおありなんでせう。自分の力を信じて猛闘しさへすれば、何事か成らざらんやだと、僕は思ふんです。君も僕も未だ青年なんだから、此から何でも出來るんですよ。既に失つた物を回復す位な事は、容易だらうと思ふんです。君と僕と元二君と、三人で努力さへすりやア、一家は常に平和なんだ。僕も君の力を信じるから、君も僕の力を信じて呉れたまへ。なアに、三人、揃つて努力すりや、何でもありやアせんさ。』

勝彌に斯う云はれると、長夫もつい然樣らしい氣になつた。

『よろしい、大いに猛闘しよう。』

千代乃は長夫の此語を聞くと、心から嬉しさうに微笑んだ。元二は横を向いて冷笑して居た。

長夫は元二の冷笑つた顏を見たので默つては居ない。

『元二、お前も何だね、久能木君や叔父さん見たいに、内の爲に、働くんだね。』

元二は何を云ふかと云ひたさうな顏を爲て返辭をせぬ。

勝彌は眉を顰せながら、

『長夫君、元二君は僕が受合つて屹度働かせるけれども、今直ぐに、月々定つて幾計宛か

入金爲ろと云ふのは無理ぢやアないですか。元二君の眞の活動は、云はゞ未來にあるんだから、君と僕とで、其道を拓く事に盡力して遣るべきぢやないかと思ふんです。』

長夫は不平に勝へざる體で、

『ぢやア何ですか。元二には今如何するッて力が無いから、當分入金なんざア出來ないて云ふんですか。ぢやア、つまり君や私が養つて遣る譯なんだ。』

『僕ア叔父さんなんかに養つて貰ふ事アない。』

『君は默つて居たまへ。』と、勝彌は元二を制して置いて長夫に對ひ、『全然君や僕が養ふと云ふ譯ぢやアない。僕は今も云つた通り、受け合つて元二君を働かせる。働かせると云つたつて、今直ぐに月給取に爲る事は不可能だし、何か書せるたつて、其も今は不可能だから、僕が寫字を賴んで、出來るだけ報酬を多く拂ふ事にして、其を入金する事にしたら、元二君一人だけの生活費には充分だらうと思ふんです。今の處では、其以上は不可能なんだから、君も其で不承して貰ひたいんです。』

長夫は直ぐ返辭をせぬ。千代乃は氣の毒さうに、

『其樣に迄爲て戴いては、餘り心苦しう御在ますから、』

『いえ、其樣御心配には及ばないんです。僕は未だ獨身ですし、他に繫累も無いですし、多少小遣があれば可いんです。なアに、收入の全部を出したつて多寡が知れてるんですから、御心配なさらない樣にして下さい。』

『どうも恐入ります。長夫、先生が彼樣に迄仰有つて下さるんだから、お前も其氣でお居でいなくちや不可いよ。』

長夫は口で返辭は爲なかつたけれども、態度には承知して居ると云はぬばかりの風を爲て見せた。

『御母さん、鳥渡入らッしやッて下さい。』

勝彌はお瀧に座敷に來て貰つて、

『彼所で聞いて居らッしやつたでせうが、長夫君にも異存が無いと云ふ事ですから、昨晩御相談した樣な事になすつちや如何ですか。』

お瀧は輕い調子で、

『皆さんが其にお極めでしたら、私の方はもと〳〵異存はありませんですから、よろしく御願ひ申します。』

『では、さう極つたのですね。皆さん御異存はありませんでせうな。』

誰一人否と語に出して云ふ者はなかつた。

勝彌は机の抽匣から半紙に包んだ物を出して、其を開くと幾枚かの五圓札が見はれた。其中一枚を抽取り、殘を包紙のまゝお瀧の前に置いて、

『其處に二十五圓ある筈ですから、僕の分と、元二君の分を五圓ごとして上げて置きます。』

『今月はもう多分に頂戴してありますから、』

『いえ、今日から更に御約束通履行したい。其儘預つて置いて下さい。』

『さうですか。ぢやア、御預り申して置きますよ。』と、お瀧は白い齒を見せて笑ひながら、『先生、御蔭さまで極が付ましたんですから、其御禮に一杯差上る事に致しませうね。』

さまも、長夫さんも御相伴をお爲でせう。美都ちやん、お酒があつたか知ら見てお呉れ。』

お瀧は紙包を手に取りながら、茶の間へ入ると、聽て美都子が家外へ駈出して行く。

三月もあと二日で盡はると云ふ日の午後、勝彌は何を思ふともなく、机に倚れて、うと〳〵と睡魔に侵されて居ると、手荒く格子戸を開ける音が爲たので、われにかへつて傍を見ると、謄寫物を爲て居る筈の元二が見えぬ。

『御免。』と、玄關には案内を請ふ男の聲。

勝彌が自分で取次に出ようと立上つた時、茶の間から誰か玄關へ行く足音が爲たので、躊躇ながら樣子を聞いて居た。

『久能木先生は御在宅ですか。』と云つたのは小川水鏡の聲だ。

『居らッしやいます。』と答へたのは美都子。

『小川ですが、先生に御面會を願ひたいですが。』

『鳥渡お待ち遊ばして。』

勝彌は、水鏡なぞに逢つたつて可厭な思をするばかりだから、玄關から追返して遣らうと思つて居ると、美都子が來て、

『小川さんて方が御入來なさいまして、』

『今多忙だから、又來る樣にと云つて下さい。』

『先生、鳥渡御目に掛れば可いんです。』

水鏡は無遠慮にも美都子の後に尾いて、座敷の入口に來て居たのだ。

勝彌は眼を險しくして屹度見上げて、

『一寸で可いなら逢はう。』

『〇〇社の稿料を持參したんです。』

『さうか。まア坐りたまへ。』

美都子が茶の間へ退くと、水鏡は其跡に坐つて、懷から封狀を取出し、

『御滿足でない事は無論ですが、これだけ社から寄越しましたから、其儘御届すると云ふ事でした。』

『さうかね。』と、勝彌は水鏡から受取つた封筒の上に記した金高を見たばかりで、机の上に置き、『紫瘦君に宜しく云つて呉れたまへ。』

美都子が茶を運んで來て、二人に進めて直ぐに退く。

水鏡は美都子が茶の間に入つてから迄も、尙ほ其方を見て居たが、勝彌を見返るよりにや〳〵と笑を含んで、

『先生、眞個女神ですな。』

勝彌は聞かぬ振を爲ながら、

『しばらく御無沙汰してるが、紫瘦君は此頃如何して居られるね。相變らず、勉强して書いて居られるだらうね。』

『紫瘦先生ですか。』と、水鏡は冷笑ひながら、『如何して勉强どころぢやアないですよ。毎日奥さんと衝突されるんですから、あれぢやア到底作なんぞ出來ッこありませんや。』

『さうかい。それは困るね。紫瘦君が例の通、不理窟ばかり云つてるからなんだらう。』

『いえ、先生よりか奥さんの方が火の手が强いんです。奥さんは旣う先生に愛想を盡して

了つたんですね。何時でも離婚て了はうと云ふ氣で御居でいすから、中々強いんですよ。奥さんは、僕が彼家へ來てからも隨分柔順な方で、先生に反抗されるなんて事は殆んど無かつたんですが、此前に先生が御來訪の事がありましたな、例のそれ、經驗を積む爲には父ともなり夫ともなるッて一件ですな、彼の時が衝突の序幕で、それからッてものは、のべつ幕なしなんですからな。先生も弱り切つて居られるんです。』

『さうかね。困つたもんだね。』と、勝彌は深く眉を顰せて、『紫瘦君も無論惡いけれども、奥さんも其れでは不可いね。僕が二三日中に出掛けて行つて、仲裁する事に爲よう。』

『さう願へれば仕合です。』

『歸つたら、奥さんにも宜く云つて呉れたまへ。』

『承知しました。』

勝彌は今は水鏡が辭し去るべき時だと口を噤んだ。けれども、水鏡は尙ほ立たうとはせず、何か談話の糸口がありさうなものだと探して居る。

『さうだ。受取を上るんだつけ。』

『それには及ばないでせう。』

『いや、然樣でない。』

勝彌が原稿用の半紙に領收書を書いて居ると、水鏡は尙ほ頻りに茶の間を見返りながら、

『柏木君は留守なんですか。』

『然樣らしいね、今朝から見えないから。』

勝彌は領收書を水鏡の前に置いて、

『紫瘦君に宜しく云つて呉れたまへ。僕は大急で書かなきやならない物があるから、此で失敬する。何も御苦勞でした。』

水鏡も斯う云はれては辭し去らざるを得ない。

『柏木君に宜しく願ひます。』

『はア。』

不平らしい顏を爲ながら辭し去る水鏡を、勝彌は態と玄關へ送出して、彼が門外へ出で去

つたを見て座敷に歸つて來ると、美都子が茶碗座布團なぞを片付けて居た。

『兄樣は何處へ行つたの。』

『僕は此處に居ます。』

元二は茶の間から出て來た。

『水鏡が來た時も彼處に居たんかね。』

『屋後に居たんです。誰か來た樣ですから茶の間まで來ると、聲が彼人ですから、態と逢はなかつたんです。』

『それは可かつた。今後も其方針を取る方が可い。』

二人が話して居ると、格子戸の外からまた案内を乞ふた者がある。而も女の聲だ。

勝彌は聞いた樣な聲だとは思ひながらも、聲が低かつたので、確と其と定めかねて居る中にまた案内を乞ふのである。けれども、依然聲が低いので誰とも分らない。

玄關へ出て行つた元二は、座敷の勝彌を呼掛けて、

『先生、太田さんの奥さんが御入來です。』

『え、太田君の、』と、勝彌は不思議に思ひながら玄關へ行つて見ると、都根子が微笑みながら脱沓に立つて居た。

『奥さん、能く御入來でしたね。さア お上り下さい。』

『よろしう御在ますか。』

『いゝですとも。』

『ちやア、少時御邪魔を致しますよ。』

元二が座敷に座布團を出しなぞして居る中に、都根子は勝彌に伴はれて入つて來た。

『何卒お敷き下さい。私も御免被ります。』

勝彌は都根子に座布團を敷かせて、自分も敷き、

『今まで小川が來て居ました。其邊で、お逢ひではありませんでしたか。』

『いゝえ。何爲に上りましたの。』

勝彌は稿料を届けに來た事を話して、

『紫痩君に宜く願ひます。』

『行屆かない人ですから……。』と都根子は微笑みながら、『私、もう可厭になッ了ひましたの。』

勝彌は其と察しながらも、

『何がですか。』

『太田と一緒に居りますのが。』

『はゝはゝ。』と、勝彌は態と笑出して、『其樣事を仰有つて如何なさるんです。』

『如何つて事もありませんけれども。』と、淋しい微笑を浮べて垂頭ながら、『ですからね、私毎日此樣に遊んで歩いてますの。今日は生家へ參りまして、其から御當家へ伺ひましたの。』

勝彌は何とも云はないで、凝乎と都根子の顏を見て居た。

勝彌が凝乎と此方を見て、何とも云はないのから思ふと、都根子は何か侮蔑されてる樣な氣がして面白くない。けれども、直ぐに思返した、久能木は何の理由も無いのに他を侮蔑する樣な人ではないと。これは多分何か多忙い事でもあつて、心なく自分が訪ねたのを迷惑に思ふのではあるまいか。それならば其と、明々地に云つて呉れゝば可いのに、平素の氣象にも似合ない仕方だ。迷惑がられて強て居るでもないとも思つて見る。それで居て、此儘辭去るのが何だか物足りない樣で、勝彌が何とも云つて呉れないのが恨めしい樣な氣もする。

『久能木さん、御邪魔なのではありませんか。御多忙しきやァ復た伺ひますは。』

勝彌は都根子が毎日遊んで歩いてると云つた語に就いて、深く考へて居たところに斯う云はれたので、稍狼狽した。

『いや、其樣事は無いんです。今日に限つて書かなきやならんと云ふものも無いんです。邪魔なぞと云ふ事は無論あらう筈も無いんです。能く御來訪ね下すつたと、實は感謝してるですから。』

『おほゝ。』と、都根子は可笑さうに笑つた。『さう仰有つて下さると、私嬉しう御座んすけれども……何だか考へて居らつしやる樣ですから、つい今見たいな事を申しましたのよ。私如何して此樣に邪推深いんでせう。おほゝ。』

勝彌も微笑みながら、

『貴方に碌々御返辭も爲ないで考へてたんですから、貴方の邪推ちやアない、僕が惡かつたんだ。併し、』と、凝乎と都根子を見て、『毎日遊んで歩いてると仰有つたのが、僕には不思議に思はれたから、つい御返辭致すのも忘れて考へて居たんです。』

『おほゝ。』と、また笑つた。『久能木さん、貴方が不思議に思召す筈はありませんでせう。』

『如何して。』

『如何してと仰有つて、貴方は事情を能く御存知の筈ですは。私何ですもの、自分を愛してない夫と、一緒に居るのは可厭ですもの。』

『さう仰有れば、僕は知らんとは云はないですが。併し、彼時の紫痩君の語を、貴方が直ちに御自分が關した事だと、お思ひなさるにも及ぶまいかと思んです。』

『太田も其樣事を申してますけども、私彼時から太田の心を信じなくなつて了ひました。』

『太田はいろ〳〵辯解しましてね、彼時の語を取消しも爲やう、謝して氣が濟むものなの。』

『太田も其樣事を申してますけども、私其樣事を爲て貰はないだつて可いッて云つて遣りまして、取消すと申したつても、取消したから消えると云ふ者ではありませんのですから、私其樣事を爲て貰はないだつて可いッて云つて遣りましたの。』と、都根子の顏には嘲むが如き色が浮んだ。

『紫痩君が其程までに云はれても、貴方は、思返すと云ふ事は、出來ないと仰有るんですか。』

『さうですの。』

『それは些と、貴方にしては不似合では無いですか知ら。』

『どう爲てゞ御在ませう。』と、都根子は勝彌の顏を睨む樣に見ながら膝を進めた。

と、隔の唐紙が靜かにすうと開いて、美都子が茶を運んで來た。

都根子は自分の身の上の大事も忘れたかの如く、茶を進める迄の美都子の樣子に見恍れて居た。

美都子は伏目になつて茶を進めながらも、都根子の羽織から着衣の色合と云ひ、地質縞柄と云ひ、時勢粧を追ひたる好を見ると、何となく鼻白さるゝ氣がして、直ぐに退かうとしたのを都根子に呼止められた。

『あのう貴方。』と、都根子は美都子を呼掛けて置いて、勝彌に向ひ、『美都子さんで居らつしやるんでせう。御紹介が願へませんでせうか。』

『それは可いですとも。美都子さん、此方は僕の親友の太田君――僕が能く噂する紫瘦君の奥さんで居らつしやるんです。』

『美都子さん、御初に御目に掛ります。貴女の御噂は久能木さんから承はつて居りまして、何卒してお目に掛りたい〳〵と思つて居ましたんですよ。今後、何卒御心安く願ひますよ。』

『私からお願ひ申します。』

美都子は都根子の半分も口を利き得ず、唯斯う答へたのみで、丁寧に御辭儀を爲て、顏を赧くしながら茶の間へ退いた。

『眞個にお美しく居らつしやいますのね。』

勝彌は何とも答へず唯笑つて居る。

『お何歳にお成りなさいますの。』

『十七だと云ふ事です。』

『丁度好う御座んすのね。』

途端に元二が入つて來た。都根子は早く美都子と結婚の式を擧げる方が可いと、勝彌に勸める意であつたけれども、元二の前では遠慮されて、つい口を噤んだのである。

『鳥渡失禮します。』

勝彌が茶の間に行つたので、後には元二と都根子の差向になつた。

都根子は、元二を見ても思ふ。兄妹揃も揃つて、如何して斯う美しく生付かれたのであらうか。何程美しい人にも、打てば非を打てるものであるのに、二人が二人何處を如何と、缺點を見出さうにも見出されないのは不思議な程だ。妹さんを見受けたところ、少しも浮いた樣子が無く、性質も善さゝうで、此樣人を妻に迎へた男こそ幸福である。久能木さんとは相應の緣だから、何れさうなる事には定つて居るのであらうが、自分からも勸めて早く結婚させたい。さうなれば、久能木さんも幸福なら美都子さんも幸福だ。人は美しく生れたと云ふだけでは、眞の幸福とは云へないけれども、美都子さんの樣に心も共に美しい

人は幸福であるべき筈だ。兄さんの方は學問が無いの、今の青年が謄寫物などして滿足してるのは氣慨が無いのと、夫や小川は能く云はないけれども、自分の見たところでは妹さん同樣、心に邪氣などありさうにも思はれない。矢張人に愛せられる人だ。

斯う思ひながら元二を見ると、其美しさが一層目に立つ。

『此人が何樣婦人に愛されて、何樣婦人を愛するだらうか知ら。』

都根子は不圖斯う思ひながら、凝乎と元二を見ると、斜に机に對つて謄寫すべき原稿に眼を据ゑて居る樣子に、あやしくも心を惹る〻樣である。

『眞實の愛を捧げる人なら、學問が無くとも……いえ私がさうではないけれども……。』

自分で自分の心に言譯を爲た時、勝彌が茶の間から歸つて來た。

『奥さん、失禮しました。』

『い〻え。』

都根子の顏は逆上せもしたかの樣に紅くなつて居た。

『先生、此處二三字讀めないんですが。』

元二が原稿の或個所を指し示したのを、勝彌は差覗いて、斯く〳〵讀むのであると敎へる。

『さうですか。解りました。紙が殘二三枚になりましたが、』

『僕の方にも無い。』

『鳥渡買つて參りませう。他に御用はありませんですか。』

『僕の方には無い。』

元二は都根子へも會釋を爲し、茶の間へ入つて、其から玄關へと出て行くのを、美都子が後から追縋つて低聲で頼んで居るのが、元二が聲に注意しないので、膓げながら座敷まで其事柄が聞こえたので、勝彌は困つた顏を爲る。

『久能木さん、何か御心配下さる樣なら、私御暇爲ますは。』

『其樣事は無いんです。何卒御遠慮なさらないで、緩々なすつて下さい。』

『本當に構つて下さつちや不厭ですよ。』と云つて、茶の間を見返りながら小聲になり、『久能木さん、早く御結婚なすつた方が能う御座んすよ。美都子さんには始めてお目に掛つたん

ですけども、彼方なら貴方の奥さんになすつたッて、御後悔なさる樣な事は決してありませんは。私受合つてよ。』

勝彌は好意を謝するかの樣に、稍頭を低げながら、

『まだ其時機が來ないんですから、愈よ然樣と決した場合には、萬事御配慮が願はんきやアならないと思つて居ます。』

『其時は、私に既う其資格がありませんでせうよ。』

『何故なんです。』

『だつて、夫婦揃つてなきや、務まらない大役なんでせう。』

勝彌は屹度目を睜つた。

『奥さん、では何ですか、貴方は早晩、紫瘦君と御離別なさる御意ですか。』

『えゝ。』と、伏目になる。

『そりや不可です。貴方が其樣御心をお起しなさると云ふ事は無いんです。紫瘦君は自分が失言したと覺つたから、貴方に謝すとまで云はれたんでせう。夫が妻に謝すると云ふ事は、尋常で出來るものでは無んです。紫瘦君は其を敢て爲ようと云ふんでせう。其でも免さんと云ふ事になると、温良であるべき婦人の美德を傷けはせんでせうか。奥さん、僕は斯う思ふんです、貴方が紫瘦君と御結婚なすつた當時に立返つて、紫瘦君の愛を御受けなすつた時、紫瘦君に愛をお捧げなすつた時の感情を考へて下すつたら、今一應、いや再應も其上にも、充分熟慮なさるべき事ではありますまいか。ですから僕は、貴方が紫瘦君と今一應、互に遠慮せずに所思を陳べて見る事になさつては如何ですか。御許し下さるなら、僕が其場に立會つても可いんです。さうして、互の意思を明らかになすつた上で、始めて何れにも御決しなさる方が能くはないでせうか。奥さん、能くお考へなさるが可いでせう。』

都根子は伏目になつた儘聞いて居たが、勝彌の語がきれると顔を上げた。

『私が今太田を去りますのは、婦人としてあるまじき事でせうか知ら。』

『さア。』と、都根子の顔を見返しながら、

『世間には或ひはあるかも知れんです。併し、貴方にはありたくないと思ふんです。』

『私も然樣は思ひますけども、然樣しなきやアならなくされたら詮方がありませんでせ

う。』

『果して詮方が無いんでせうか。奥さん、其處が熟慮なさるべき所ぢやないでせうか。』

勝彌が疑乎と見ると、都根子はまた伏目になつた。

『ですけれども、太田は私を愛してやしませんでせう。夫が愛して居なくッても、妻は夫を愛さなきやならないものでせうか知ら。』と、都根子は思切つた體で斯う云ふのだ。

『俳し其は、太田君が眞箇貴方を愛して居られないか否が決せられた上でなければ、』

『いえ、私を愛してない事は、貴方も能く御存知の筈ですは。』

『其がですよ、其が實際、太田君の心か否かゃ疑問なんですからな。太田君は充分貴方を愛して居られる。とより外僕には思へないんです。いや、僕は眞實然樣思つてるんです。僕が太田君と交際爲始めてから、今日まで太田君と貴方との間に、僕は何等異つた有樣を見出す事が出來なかつたんです。僕は其が、太田君が今尙ほ舊の如く貴方を愛して居られる證據だと思ふんです。』

『貴方は然樣仰有つて下さいますけども、太田の樣子は頃日眞箇變つてますもの。』

『其はつい頃日の事なんでせう。而も先日僕が伺つた時からの事なんでせう。』

『いゝえ。今になつて考へますと、其前からなんですは。書いた物を讀んで見ますとね、隨分思當る事がありますもの。』

『太田君が書かれた作物と心とを、同一だと御覽なさらなくも可いではないでせうか。』

『ですけども、經驗した事でなきやァ書かないて申してますでせう。』

『それは太田君の口ばかしです。それも貴方に云はれたのではなく、僕の辯難に對して一時を糊塗されたのに過ぎないんです。貴方が御考なすつても御解りでせう、太田君の愛情が今と昔と何程の差があるかゝですねえ。僕は些も變つてやしない、御結婚當時其儘ぢやァないかと思ふんですよ。奥さん、如何です、太田君が貴方を厭はるゝ樣な形跡が些でも見えるですか。』

勝彌が疑乎と都根子を見ると、伏目になつたまゝで何も云はずに居る。

勝彌に云はれて見ると、夫の自分に對する樣子には別に變つた點も見ない。して見ると、夫は口と心とは別々で、久能木さんの批難に對する辯解に過ぎなかつたのか知ら。いえ然

樣でも無い樣だ――小川と互に意を得たらしい談話の角々から察しても、口ばかりとは思へない事もあつた。よし久能木さんの云はれる通口と心と別だとして見ても、太田紫痩とも云はれる作家としては、羞かしい態度と云はなきやならない。夫の心は眞箇其程まで墮落したのであらうか。何と云ふ淺間しい事か。自分は夫が作家である事を誇として居たが、おもへば誇どころか羞しくてならぬ。夫が尙ほ自分を愛して居るとすれば嬉しくはあるが、公人としての夫の品性の淺間しさには愛想が盡きた。よし夫が眞實自分を愛して居るものとしてから、自分に以前に變らず夫を愛する事が出來るか如何か。と思來たると、口惜しい樣な果敢ない樣な思が胸一杯になつて、そゞろに涙が差含むのである。

『奥さん、お考になりましたか。』

『はい。』と、一入深く垂頭いて、『ですけどもね、太田を以前通愛する氣になれなさゝうですは。』

『何故ですか。太田君が貴方が滿足なさるだけの誓をされるとしたらッ。』

『いゝえ、口と心と違ふ人の誓言は信じられませんは。貴方は然樣は思召さなくつて。』

『太田君は貴女に對しては、心も語も同一なんです。』

『それが可厭ですは。何故何人にだつて同一でないんでせう。私、それが殘念で御在ますは。』

都根子は終に手巾を顏に當て忍音なから泣出した。

途端に格子戸が開いたのは、元二が歸つたらしい。

『美都子〳〵。』

元二が呼ぶと美都子が駈出して行つた樣子で、何か物の蓋を明ける樣な音がすると、難有う御在ますと云ふ男の聲が聞こえて、格子戸を閉める音が爲たのは、其男が歸つたのらしい。

座敷で玄關の樣子を聞いて居た勝彌と都根子は、其間談話を途斷らして居ると、元二が半紙の幾帖かを丸く卷たのを持ちながら入つて來た。

『先生、此前のと同質の紙がありませんでしたが、可いでせうか。』

『可いとも。』

元二は直ぐに机に向つて紙を折始めた。

都根子は元二の樣子をつく〴〵見ながら、

『久能木さん、何誌にお出しなさいますの。』

『何誌へ遣ると云ふ當は無いんですが、元二君の仕事を拵へる爲に書いて見て居るのです。』

『さうで御在ますか。』

都根子は勝彌が元二の仕事を拵へる爲だと云ふ其實意に感じながら、尙ほ元二が紙を折るさまを見て居た。

『先生。』

美都子が唐紙を細目に開けて、目に物を云はせて、勝彌の指圖を待つて居る。

『何卒出して下さい。』

美都子は鮨を手綺麗に盛分けた皿の塗盆に載せたのを、都根子と勝彌の前に進めて退らうとするのを、勝彌は呼止めて、

『兄さんのも此處に持つて來て下さい。』

美都子は元二の顏を見る。

『僕は彼方で頂戴します。』

『此處で一緒に食べたまへな。』

『さうなすつて下すつた方が、戴きよう御在んすは。』と、都根子は態と笑ひながら斯う云つて、『美都子さんも、此處に居らしッて下さいましな。』

美都子は微笑みながら退いたが、聽て兄の分を持つて來ると、逃げる樣にして茶の間に入つて了つた。

『御馳走になりに押掛けた樣で御在ますのね。おほゝ。』

『滿らんもので失禮ですが、何卒箸を御取り下さい。』

『頂戴致します。』

都根子が箸を取上げた時、唐紙の蔭から美都子が兄を呼んだので、元二は立つて行つたが、直ぐに茶を運んで來て二人に進め、自分の盆の上にも茶碗を載せた。

都根子は茶を飲みながら元二に對ひ、
『美都子さんの學校は何方ですか。』
『何處へも行つて居ないんです。』
勝彌が傍から、
『學校へ行のは可厭だ、家で勉强したいと云ふ事ですから、つい三四日前から、僕が教師の格で教へてるんです。』
『さうで御在ますか。でも、學校が何故お可厭なのでせうね。』
『今の女學生が厭ひなんですね。隣家にも學校へ通つてる娘さんが居るんですが、毎朝仲間が二三人誘ひに來る樣ですがね、其が何の爲かと云ふとですね、元二君を見たいからなんだから驚くです。』
勝彌がから〳〵と笑ふと、元二は顏を眞紅に爲ながら手を振つて、
『奥さん、其樣事は無いんですよ。先生が好加減な事を。』
『いや、好加減な事ぢやない、事實なんだ。奥さん、此頃の女學生の風儀には愛想が盡きるですね。お宅の小川、彼の水鏡を女に爲た樣な海老茶が多いんですからな。』
都根子も頬を赧めながら、
『眞箇で御在ますは。美都子さんが、學校を可厭だと仰有るのも御無理はありませんは。私なんぞの學校時代には、まだ其樣でもありませんでしたがね。』
『さうですとも。併し、今日は其が事實なんだから驚かざるを得ないんです。』
『ですけれども、先生の今の御話は事實ぢやないんです。奥さんの前で、先生が彼樣事なんかを。』
『君に罪は無いんだから、辯解する必要は無いんだ。』
勝彌がまたから〳〵と笑つたので都根子も笑ふ。元二はます〳〵顏を赤くする。

（二五）

三月も今日一日の三十一日の夕方となつたが、平生ならば既う歸宅るべき筈の長夫が如

何したのか歸つて來ない。此樣事が無い樣にと、千代乃は今朝長夫が出勤する時玄關まで送つて行つて、今日は銀行が退出たら寄道をせずに歸つてお呉れ。而して久能木先生との約束を履行してお呉れと、諄々と云聞かせて置いた、今朝ばかりではない、昨日も一昨日も暮も注意して置いたのであつた。それだのに、日が暮れようとする今になつても歸宅らないから、また例の持病が發つたものと見える、以前の樣に内々ばかりなら可いけれども、今は先生がお居での上に、堅く〳〵お約束迄して居るのだから、今夜歸らぬ樣な事でもあれば、私の面目は潰れて了ふ。それも可いとして、頼みにならぬ相手にならぬ男だと、長夫が愛想を盡されるのが如何にも辛い。自分の腹を痛めた子でないから、繼子根生を發させまいとお瀧より大切に育てゝ、出來るだけ其自由を通させて置いたのが、今となつては仇となつた。今日始めてそれと知たのではない。此儘では當人の不爲であると氣着かぬではなかつたが、早晩自分から其處に想到くであらうと打擲つて置いたのが私の過失で、終に彼樣男に成つて了つた。之を思ふと、亡夫に對しても申譯が無く、久能木さんに會はす顔が無い。今まで歸宅らないのが、私が心配して居る樣な事からでなく、無據い用の爲に外へ廻つたので、無事に月給を持つて歸つて呉れたら何樣に嬉しからう。何卒さうあつて欲しい。外の時とは違ふから、其位の事は解つて居ようし、私の願望通無事に歸つて呉れるであらう。どうか然樣あつて欲い。と、種々に思惱んでは、唯太息を吐くのみであつた。

美都子は祖母の樣子に其心の中を察して居るから、傍に居て太息を聞くのが辛くてならぬ。で、勁ともすると臺所へ逃げて行つては自分も亦太息を吐いて居た。

元二は長夫が斯うであるのは前から見え透いた事だと思ふから、お瀧に顔を見合せては冷笑つて居る。お瀧は氣にも掛けぬ體で、今月ほど月末の拂が綺麗に行つた事は無いなぞと云つて居る。

其内に洋燈に火が點いた。長夫は未だ歸宅らぬ。

勝彌は机に倚つて新刊の雜誌を讀んで居たが、稍倦んだ樣子で、紙卷莫に火鉢の火を移しながら元二を見返つて、

『元二君。』

『はい。』

『如何だッたらうね。』と、小聲で、『母さんは困つてお居でぢやなかつたかね。』
『何をですか。』
『月末の始末にさ。』
『いえ、綺麗に拂が出來たッて云つてました。』
『それは好都合だつたね。』と、考へて居たが、『其は事實だらうか。』
『母が然樣云つてたんです。』
『頃日は毎日御馳走があるから、隨分經費が嵩むだらうと思ふんだよ。今日は無事に濟んでも、明日から直ぐに母さんが御困りぢやアあるまいか、僕は其を懸念してるんだがねえ。』
元二は暫時默つて居たが、
『でも、叔父が俸給を持つて來る筈ですから、直ぐに困る樣な事もありませんでせう。』
『それも然樣だね。併し、今月から長夫君の俸給を當には出來ないと思ふ。』
『何故でせう。』と、眼を睜る。
『だッて、彼の相談を爲たのは中旬だつたから、長夫君が其以前に何かの買物でも爲て居たんだと、今月の俸給は既に零になつてたかも知れないんだからねえ。だから、今月分から當に爲て居るのは、無理ぢやないか知ら。』
『さうです。』と、元二は溜息を吐く。
茶の間には千代乃が耳を澄して居た。
『だからねえ元二君、君が餘りやかましく云はない方が可いよ。』
『僕は如何でも可いんですが、御祖母さんが先生に對して、』
『だから、僕がさう云つてるんだ。御祖母さんに心配させちや御氣の毒だから、今夜長夫君が歸られない樣な事があつても、君は知らない風を爲て居たまへ。それでないと、御祖母さんは可哀相だよ。』
二人の話聲が初めは低かつたが、何時しか普通の聲調になつて居たので、茶の間に耳を澄して居た千代乃は充分聞取り得たのである。
『何と云ふ親切な人だらう。』
千代乃は覺えず斯う呟くと共に、涙をはら〳〵と零した。

『元二君、母さんは何處に御居でかね。』
『多分臺所に居ますでせう。』
『今でなくても可いがね、後で此處に來て戴く樣に、お話爲て呉たまへ。』
『今でも可いでせうよ、母さんの方は。』
『なに後で可いよ。』
元二は茶の間を見返りながら、
『夕飯が遲い樣ですが、先生はお腹が御減きなさりはせんですか。』
『まだ其樣でも無い。』
『僕は非常に減つ了つた。』
臺所から茶の間に來る足音がすると、お瀧が大きな聲で、『元二、御飯に爲るからね、先生に然樣申上げてお呉れ。』
『母さん、何だつて此樣に遲くしたの。』
『澤山御馳走を爲て上げようと思つてさ。』と、笑ふ聲がする。

『先生、まゐりませうか。』
『さう爲よう。』
勝彌は元二と共に茶の間へ行き、食卓の何時もの席に着く。日外の勝彌の希望から、其以來一家一團となつて食卓に着く事に爲て居たのである。
千代乃の前には例の通晩酌の德利が置かれてあるけれども、何やら氣が進まぬらしく、伏せてある猪口を取上げようともせぬ。
『美都ちやんや、御祖母さまに御酌を爲てお上げ。』
母の命に美都子は德利を手に取つて、氣の毒さうに祖母の顏色を窺ひながら、
『御祖母さま。』
『さうさねえ、少し戴いて見ようかね。』
千代乃は美都子に酌をさせて一口飲んだけれども、何か苦い物でも飲んだ顏を爲て居る。
『御燗は如何ですか。』と、お瀧が聞く。
『丁度可いよ。』とばかりで、再び猪口を取上げようとはせぬ。

お瀧と美都子は云ふまでもなく、勝彌も元二も千代乃が長夫の上を氣遣つて、好きな酒も旨くは進らぬと知つて居るので、何人も長夫の事など口へ出すものは無かつた。

勝彌はそこ〳〵に飯を濟せて座敷へ來ると、元二も續いて來た。二人は顏を見合せたが、何にも云はない。

茶の間では、千代乃がやうやく猪口を取上げて二口目を飲んだが、覺えず太息を吐いて、

『母さん、長夫にも困つ了ふね。』

『もう御歸宅でせうよ。』と、お瀧は輕く受ける。

千代乃は柱時計を見上げて、

『もう七時にもなるのに。』

美都子は祖母の語を打消す樣に

『御祖母さま、お酌してよ。』と、注いで遣りながら、『八時までには屹度歸つて入らしッてよ。』

『それがねえ。』

今度はお瀧が打消した。

『美都ちやん、お前も一緒にお食べが可いよ。』

『本當に其が可いよ。お酌は自分で爲るから早く食べてお呉れ。』

美都子も此に辛く箸を取つた。

『母さま、御膳は濟んだんですか。』

元二が座敷から聲を掛ける。

『私だけは濟んだよ。』

『一寸此處に來て頂戴、先生がお話があるさうですから。』

『今行きますよ。』

癒てお瀧は唾つて居る鐵三を抱いたまゝ座敷に來た。

勝彌は机の抽匣より太田から屆いた其儘の封筒を取出し、其中から五圓札一枚を拔取り、封筒の儘お瀧の前に置いて、

『母さん、其中に十五圓入つてるんですが、何卒其方に藏つて置いて下さい。御入用の時

は、御自由にお遣ひ下すつて可いんですよ。』

お滝は面に溢るゝばかりの笑を湛えたが、直ぐに取上げようとはしなかつた。

『先日お預り申しましたのが、まだ殘つてますから、其内に無くなりましたら其時拝借致しますから、』

『いえ、僕の方に置くのも、お預しとくのも同一です。何卒、其方に藏つて置て下さい。』

『左様で御在ますか。』と、氣の毒さうに封筒を取上げた。

元二が傍から、勝彌が其金を預けるに就いての好意を述べて、

『……だからね母さん、叔父さんが何も持つて歸らないだつて、何にも云はない方が可いよ。』

お滝も此時は心から勝彌の厚情に感じもし服しもした。

『難有う御在ます。母も何様に喜ぶか知れませんよ。』

『いえ、其様に仰有つて下さつちや恐縮です。それに、御祖母さんには何卒其様事を御話下さらない様に願ひます。却つて御心配なさる様な事にでもなつては、僕の希望に反するんですから、母さんだけ御承知の事に願ひたいんです。』

『難有う御在ます。』

お滝は今時の若い人には眞箇珍らしい人だと、勝彌を尊敬する氣にもなつた。

茶の間では千代乃が美都子に頻りに囁いて居た。

『……お解りかえ。御祖母さんはねえ、先刻一人で泣いた位ですよ。叔父さんを先生に比較べて御覽よ、年こそ三四歳上だけれども、心掛は天地の相違ですよ。兄さんの友達にだッて、叔父さんの友達にだッて、父さんの懇意な人にだッて、先生見たいな人は、いゝえ先生の足下にも追付く人は、一人もありはしないんだよ。お前は如何お思ひかね。』

美都子は口にこそ何ども云はなかつたけれども、祖母を見て居る眼の色は、確かに祖母と同一心である事を示して居た。

『お前も然様思つてお居でだらうね。』

美都子は伏目になりながら、はッきり首肯いて見せた。

千代乃も我心を得たと云はぬばかり首肯いて、一入聲をひそめて、

『ですからね、私はお前の事を能うく先生に御頼み申して置いたんですよ。先生にさへ御頼み申して置けば、假令私が今日が日死だつても、お前は安心して居られるんですよ。ですからね、私が日外も云つて聞かせた樣に、假令何樣事があつても――兄さん始め家内中の人が先生と仲違をお爲の事があつても、お前は決して先生にお背きでないよ。一生先生に保護して戴く事に決心てお居でよ。いゝかい。ね、お解りだつたらうね。』

美都子は勝彌と自分の間に、此程深い關係が結ばれて居樣とは、今まで些も知なかつた。で、それと聞くと、はつと顔を赤めて覺えず太息を吐いた。けれども、其は其を苦痛とも滿足とも思ふまでの意からでは無く、唯此刹那に自分の上に大いなる變化の來たされた事を意識たからなのであつた。

座敷には面白さうなお瀧の話聲と、勝彌と元二との笑聲が爲て居た。

市ヶ谷の新見附にて電車を下りた勝彌は、今を盛の一重櫻の梢を仰ぎながら、新道を四番町へと越ながら、此樣子では靖國神社の櫻花も見頃であらう。今夜あたりは元二と美都子を伴ふて、九段から江戸川の夜櫻見も興が多からうなぞと思ひながら、土手に沿うて左へ折ると、端なくも太田の都根子が此方へ來るのに出會つた。

都根子は平素より色が白く見え、着服も流行を追つた好で、片手には信玄袋、片手には洋傘を深く翳して、千代田草履の歩を疾めて居たが、勝彌を見るより洋傘を肩にして、ひたと歩を止めて、態とらしい迄愛嬌を含んだ笑顔で迎へた。

『宅へ入來ッしやいますの。』

勝彌は近く歩み寄りながら、

『さうです。貴方は。』

『お宅へ伺ふ意で出てまゐりましたの。先日は大變に御世話樣になりましたんですから、其お禮も申上げたいと思つて居ましたし、』

『禮なんて、其樣事は止して戴きたい。』

『いゝえ、私彼樣好い心地だつた事は、此頃覺えない位で御在ましたは。元二さんも美郡子さんも。誠に御親切になすつて下すつたは。』

『いや些も行屆かないで失敬しました。』と、勝彌は眼を土手に沿うて遠く蛙原の方へ放ちながら、『紫瘦君は御在宅ですか。』

『はい、宅に居りますよ。』

『伺つても可いでせうな。』

『能う御座んすとも。』

『では、お供致す事に爲ませう。』

『私あのう、』と、語を濁しながら、『私お宅から生家へ廻る意で出たんですから、失禮ですけれども、此處で御別れしますは。』

『さうですか。では、失禮します。』

五六歩はなれると、都根子は何か思出した樣に勝彌を呼止めた。

『靖國神社の櫻花が今丁度盛ですから、夕方から柏木さんの御兄妹さんと、御一緒に御出掛けなさつては如何で御在ます、私も御供を致しますから。』

『左樣。』と、勝彌は考へて居る。

『生家から歸途が夕刻になりますから、御誘引に伺ひますは。』

『それは難有いですが、今夜は難かしいかも知れません。』

『兎に角伺つて見ますは。』

『僕の方から御宅へ御誘引する事に致します、もし柏木の人達が出られる樣でしたら。』

都根子は鼻皺を寄せて、

『宅へ御誘引下さる樣ですと、太田や小川が一緒にまゐると申して頑擾う御座んすは。』

『太田君が一緒の方が可いんです。』

『私それなら眞平ですは。』

勝彌は都根子が尙ほ夫に對する惡感情を除去得ないで、共に花を觀るのさへ厭ふとは、假令紫瘦に失があるにしても、餘りに女らしからぬ言動だと、一喝したい樣な氣がしたけれども、凝乎と忍んで居た。

『兎に角伺つて見ますは。失禮致します。』

都根子は會釋して新見附の方へと行く。勝彌は彼樣性質の女とは思はなかつたが　今一歩横道へ翻れると墮落する女だと、下墨もし氣の毒にも思ひながら、其から其へと考へ考へ何時か太田の門の前に來た。

格子戸に手を掛けると、内から玄關の障子を開けたのは水鏡だ。

『紫痩君は。』

『今鳥渡御留守ですが。』

『留守かね。』

『御湯にお行でゝしたから、直き御歸りになります。何卒御入り下さい。』

『入浴なら待つて居よう。』

水鏡が案内するまゝ、勝彌は座敷へ通る。

水鏡は勝彌に座布團を進めながら茶の間の方を見返り、聲を高く張つて、

『お玉どん、おいお玉どん。』

お玉は何事かと急いで臺所から出て來て、勝彌を見るより丁寧に叩頭を爲た。

『君、湯屋へ行つてね、久能木先生が入來ッしやつた事を、内の先生に申上げて來て呉れたまへ。』

『なに其には及ばんよ。』と、勝彌は止めて、『入浴なら直き御歸りだらうから、別に知らせんでも可いよ。』

『さうですか。』

『暫時待つてる中に、歸つて來られるだらう。』

『ちやア、其方は可いとして、君、先生に御茶を上げて呉れたまへ。』

お玉は茶の間の火鉢の傍に行き、がたぴしと茶を入れる仕度を爲て居る。

水鏡は紫痩が常用の火鉢を勝彌の前に押出して、火箸にて火を治しながら、

『先生、先日は失禮致しました。』

『お、、彼時は御苦勞でした。』

『如何致しまして。僕が御暇した跡に、内の奥さんが御訪ねなすつたさうですな。』

『さうだッた。生家へ御行でだッた歸途だとか云ふ事でね。』

『さうだッたさうです。』

水鏡は勝彌の顏を見て異樣な笑を含み、何か云出さうとした時、お玉が茶を持つて來て勝彌に進めた。

『お玉どん、後は僕にも出來るからね、君の方にも用があるんだらうから、彼方へ行つても可いんだよ。』

お玉は何とも云はないで臺所へ行つて了つた。

『彼後また奧さんがお訪ねなさりはしませんか。』

『其樣事は無い。何故かね。』

『先生が頻りに其を疑つてお居でなんです。』

『都根子さんが其後復た僕の宅を訪うだらうッて、紫瘦君が疑つてると云ふんだね。』

『さうです。』

『何故疑ふんだらう。』と、勝彌は眉を顰せて、『して見ると、都根子さんが僕の宅を訪ねられたのが、紫瘦君の感情を害した譯なんだね。』

『或は然樣かも知れんですな。』と、にや〳〵と笑ふ。

『君は其事に就いて、何か聞いてるだらう。』

『さうでもないです。へゝへゝへ。』

勝彌は一方ならず不快を感じた。と共に都根子が今夕花見に誘ふと云つた事を思ひ浮め、其樣な事が紫瘦に知れたら、何故に紫瘦の感情を害したのか知れないけれども、一入面白からぬ思惑を起すであらう。紫瘦に逢つた上で、場合に依つては其感情を害した所以を知置く必要があらう。などゝ考へて居ると、水鏡が突如に呼掛けた。

『先生、頗る珍談がありますせ。』

『なに、珍談。』と、眉を顰せる。

『珍談も珍談、是非先生にお聞かせ申したい珍談があるんですせ。へゝへ。』

『何樣事かね。』

『山田の須壽ちやんの一條なんですが。』

『ふうむ。』

『とう〳〵兒玉に占められた樣ですな。』

『何かと思つたら、』と、冷かに云つて、聞きともなげだ。

『先生の其の冷淡がお須壽を驅つて、終に兒玉如き男に歸さしめたんですな。』

『兒玉とお須壽、丁度好いかも知れんね。併し、彼病人のお袋は可愛相なもんだ。其は實際かね。』

『無論ですとも。』と、水銳は眉を揚げて、さも得意らしい樣子だ。

『君は時々山田へ行くのか。』

『行かない事も無いんですが、僕が須壽ちやんと兒玉との關係を知つたのは、昨夕の事なんです。』と、水銳は首を縮めて嬉しさうな笑を浮べながら、『僕が昨夜靖國神社を散歩してると、社の左側の横手の彼薄暗い――そら梅林があるでせう、彼の梅林の奥の方に人影が見えるんです。透して見ると、男と女が手を曳合つてるんですから、僕は畜生と思つて私と近寄ると、先生の名が耳に入つたんです。』

『紫瘦君の名が丶ね。』

『い丶え、貴方なんです。』

『なに僕の。』と、勝彌は覺えず眼を睜つた。

『久能木にとか、久能木がとか、云つてますから、僕は不思議だと思ひながら尙ほ近寄つて見ますとね、其が兒玉とお須壽でしたから、僕は實に驚い丁ッたんですよ。へ丶へ。』

『君は何か、唯其だけより聞かんかつたのか。』

勝彌の語調は平素と異らなかつたが、眼の中には怒氣が見えた。

『いや、聞いたです。併し、これ以上お話を爲た日には、また先生の一喝を喰ひさうですから止します。』と、にた〳〵笑つて居る。

『其樣事は無い。君が惡いのではないから、君に對して何も云ふ事は無い。唯彼等が、何故に僕の名を口に爲て居たかを知りたいんだ。』

『ちやア、申しませう。つまり兒玉が燒いてるんですね。今でも久能木の事を忘れ得ないだらうッて云ふと、其は昔の事よ、今ちや名を聞くのも可厭だはなんかんて……怪しから

んですよ、彼のお須壽ッて女は。僕は餘程横面を撲倒して遣らうかと思つた位なんです。』

勝彌は苦笑を爲ながら、

『唯其だけの事なんだね。』

『えゝ、先生の事は其だけなんです。實に怪しからんですよ。』

『いや、齒牙に掛くるに足らんさ。併し、兒玉は眞實お須壽を愛してようかね。』

『今は愛してるかも知れませんな。』

『お須壽は元來正直な女なんだが、氣弄ばれてちやア可哀相だね。』

『兒玉が兒玉ですからなア。』

『何にしても、彼の病人の母親が可哀相だ。』

『大きに然樣です。今度兒玉に逢つたら忠告して遣ります。』

『いや、放擲といた方が可いだらう。』

『さうですか知ら。』

表の格子戸が開いた。

『先生が御歸宅です。』

水鏡が玄關へ飛んで行くと、驚て紫瘦が顏をてか〳〵させながら入つて來た。

『久能木君、能く來て呉れたね。今日あたり訪ねようと思つて居たんだよ。』

『何か用があつたのかね。』

『なに、然樣でもないがね。』と、火鉢の傍に坐る。

『先日は稿料を難有う。』

『いや、今些し如何かさせたいと思つたんだがね、思ふ樣に行かんかつたよ。』

『なに、あれで充分なんだ。』

『小川君。』

紫瘦は水鏡を呼んで、

『茶を持つて來て呉れたまへ。』

水鏡は茶を取りに茶の間へ行つた。

紫瘦は何か言出さうとしては勝彌の顏を見ては、幾度か躊躇つた。

水鏡が急須と紫瘦の湯呑とを持つて來て、二人に茶を進めて置いて、其傍に坐らうとしたのを、紫瘦はじろりと見て、

『小川君、君は彼方へ行つて居ても可いんだ。』

『は、然樣ですか。』と、水鏡は澁澁玄關へ行つて了つた。

紫瘦は垂頭きながら双の手で湯呑を持つて、徐ろに茶を飲んで居たが、軈て上目に勝彌を見て微笑を含んだ。

『僕の妻にも困つて了ふ、君の感化で漸次御し難くなるんでね。』

『僕の感化？。』

勝彌が眼を睜つて凝乎と見ると、紫瘦は湯呑を下に置いて煙管を取上げながら、

『さう。君の感化と云つたのに不思議は無からう。都根子が毎日の樣に君の家に行くッて云ふちやアないかね。』

『そんな事は無い。君の妻君が、毎日僕の家を訪はれるなぞとは斷じて無い事なんだ。尤も唯一度訪はれた事はあるが……さうだ、君が小川子に稿料を屈けさせて呉れた日だ。其日一度訪はれた事はある。けれども、其以前にも以後にも、訪はれた事は斷じて無いんだ。』

『事實さうなんだね。』

『無論さ。』と、勝彌は怒氣を含んだ語調で、『紫瘦君、僕は決して虚言は云はん、斷じて云はんが、君は僕の語を信じないのか。』

『さう云ふ譯ちやない。』

『けれども、事實さうかと云つたらう。』

『云つたけれども、其は唯確めたゞけなんだよ。』

『確めると云ふ事には、何樣意味を含んでるのかね。』

『君の樣に、然樣怒つて呉れちやア困るね。』

『それは其として、僕の感化で君の妻君が御し難くなつたと云ふのは。』

『其も僕が困つてるもんだから、つい口を滑らしたんだ。まア怒らないで呉れたまへ。僕は事實困つて了つてるんだ。』と、太息を吐く。

勝彌は苦笑を爲ながら、

『君が然樣云へば、强て追窮はしないけれども、僕が君の妻君に惡感化を、』

『それは謝すよ。僕が惡かつたんだけれども、彼女にも實に困ッ了つたよ。』と、また太息を吐いて、『僕に反抗する際には、必ず久能木さんが斯うだとか彼だとか云ふんだよ。それに、毎日朝から出掛けて宅に落着いて居ないから、君の宅へ行つては君の說を聞いて來るものと思つて居たんだ。尤も、宅を出る時は、多くは生家へ行くと云つて出掛るんだがね。』

『それは困るだらう。併し、僕の宅を訪はれると思つてるのは、君の邪推なんだ。』

『さうだ、僕の邪推だ。それと云ふのが、僕も處置に困つて、實に途方に暮れてるもんだからね。』と、また太息を吐く。

紫瘦が此程弱つてる樣子を見たのは、勝彌も今日が始めてなのだ。自己を高く標榜して、他を眼下に見て居た意氣は何處へ消えたか、太息を吐く毎に肩を低く落して悄乎としてる樣が、如何にもいたゝしい。

『妻君が毎日朝から出掛けられると云ふ事は、僕にしても餘り快く思はないが……先づ君の方から折れて、充分會得されるまで說いて見ちやア如何かね。』

『それは行つて見たんだがね、頑として動かないから困るんだよ。實は其事で、君の助力も乞ひたいし、今夜あたり訪ねる意で居たんだよ。』

紫瘦は此場合だから斯う云つたのであるが、其實勝彌が都根子を煽動して居るのではないかとの疑念から、其となく勝彌を訪うて樣子を探りたかつたのである。

突如に唐紙を開けた者があるので、紫瘦がぎよつとしながら見返ると、其は水鏡で、手に一葉の葉書を以つて入つて來た。

『先生、〇〇社からです。』

『また原稿の催促だらう。』

『さうらしいです。』

『困るね。昨日出來ないと云つて遣つたのに。』

葉書を手に取つて讀んで見る、

『斯う苦しんでちや、到底筆を執る氣にはなれない。家庭に紛紜があつた日には、想も何もあつたもんぢやアない。』と、獨語の樣に云つて、勝彌を見ると苦笑を爲ながら、『君、僕

には實に苦痛なんだ。都根子の爲に僕が何位苦んでるか、彼女にだッて分らない筈は無いんだけれども……小川、君は彼方へ行つても可いよ。』

水鏡はまた澁々と退いた。

勝彌は紫瘦が妻の事から執筆も出來ないまで苦しんでると云ふのを聞いて、平生の口ほどにも無い弱い男だと思ふ。それと云ふのが、流行を追うて何方へでも動き、模倣を以つて作の生命として居る無定見の男だからだとも思ふ。けれども、其ほど苦しんで居ると聞いて、多少同情の念が起らぬでもないから、態と語調を強めて、

『君、其樣弱い事で如何する。妻君の方だつても、君の決心一つでは如何でもならうぢやアないか。何もそんなに屈託して了ふにも及ばんさ。』

『君は其樣事を云ふけれども、僕の決心一つだと云ふけれども、妻が如彼ぢや如何とも爲難いぢやアないかね。僕だッて、何も好んで屈託してるんぢやアない。何か執筆して、一日早く脱稿せんきやアならない必要に迫られてるんだよ。』

『だから、執筆するが可いぢやアないか。』

『それが出來る位なら、此樣に苦みやしない。』

『勇氣を出すさ、勇氣を。』

『君は思つたより同情の無い男だ。』

『さう思つちや困るね。僕は君に同情してればこそ、大いに君を勵ましてるんだよ。』

『僕を勵すほどの同情があるんなら、大に都根子を說得して呉れるが可いんだ。彼女は僕よりかも君を信用してるから、君が說破して呉れたら承服するだらうと思ふんだ。君、僕に同情して呉れるんなら、妻を說いて呉れたまへ。』

勝彌は首肯いた。

『僕は既に說いた事がある。』

『ちやア、矢張毎日君の宅へ行つたんだね。』と、紫瘦は屹度勝彌を見る。

『君は尙だ其樣事を云つてるのか。くだらん邪推は止したまへ。』と、勝彌は覺えず冷笑した。『君が小川を寄越した日に來られた時、僕は大に說いたんだ。貴方の今日の態度は、人の妻として決して怨す事は出來ない。たとへ紫瘦君に何樣過失があらうとも、貴女は妻た

る道を蹴さんきやア不可い。貴女は紫瘦君が自分を愛して居ないと云ふけれども、結婚當時と今日と比較して見たら如何だ、紫瘦君の愛は決して變つちやア居ない、或ひは一層深くなつてるかも知れない。』

『さうだとも。君の云ふ通だ。僕は今でも深く〳〵都根子を愛してる。』と、紫瘦は膝の進むを覺えず、『で、何かね、都根子は何と云つたかね、』

『兎に角能く考へて御覽なさい。能く考へて見ませうと云ふ事で、其時はお分れしたんさ。』

紫瘦はまた肩を低く落して、さも落膽したらしく太息を吐く。

勝彌は紫瘦の樣子に益す氣の毒になつた。

『紫瘦君、大いに勇氣を揮つて、盛んに執筆するが可いよ。人は難關に臨んで奮はんきやア駄目だ。』

『僕は駄目かも知れないよ。』

『何故其樣弱い事を云ふんだ。君の今の境遇なんざ、君の決心次第で如何でもなるんだ。ら、實は難關と云ふべきではないかも知れないんだ。今日夕刻都根子さんが僕の宅を訪はれる筈だから、』

『え、都根子が君の宅へ行くッて、今日夕刻。』

『さうなんだ。』

『では何だね、君は隱してるけれども、都根子は度々君の宅へ行つてたんだね。』と、紫瘦は憤懣に勝へざる體で、眼は輝き唇頭は顫へた。

『君は矢張邪推してる。』

『いや、今日夕刻都根子が君の宅へ行くッて事を、君は如何して知つてるんだ。昨日か何時か、都根子に逢つて約したとか、でなければ文通したとか、如何か爲なければ君が知つてる筈が無からう。』

『それは逢つたからだ。』

『それ見たまへ。』

『それも今日、而も君の宅へ來る途中で、つい其處の新見附の土手の處で逢つたんだ。何

處へお行でいすかと聞くと、僕の處へと云ふ事だッたんだ。けれども、僕は君の宅へ來る處だッたから、生家へ寄つて歸途に訪ねると云ふんだ。」

『それなら然樣と、何故云つて呉れないんだ。』

『何れ云ふ意で居たけれども、其機會が來なかつたのだ。今丁度其機會が、君の邪推に依つて作られたんだ。僕が故意に隠してたなんて、君は何處まで邪推しようと云ふんだ。』

紫痩は何とも云へなくなつて垂頭いたが、眼は尙ほ輝き、膝に置いた拳と共に顫へて居た。

勝彌が都根子が今夕自分の宅を訪ふのは、柏木の兄妹等を靖國神社の夜櫻に誘引せんが爲である事を、都根子の語其儘話すと、紫痩はぶる〳〵と顫へた。

『其ッ其ッ其が君、人の妻たる者の爲すべき所作か。夫は家に居て斯の如く煩悶してるのに、妻は夜櫻見に浮れると云ふ事が、苟くも貞操の何者たるかを知つてる婦人の爲すべき事か。蒼川君、君は、君は……。』と、餘り激し過て口が利けなくなッて、險しく輝いた眼に勝彌を睨み据ゑた。

勝彌は極めて沈着いた語調で、

『妻としてあるべき所作でない事は、恐らく君よりも僕の方が一層深く、』

『其なら何故、君は都根子に其事を、』

『いや、さうは行かない。』

『では、君は都根子が誘引へば、柏木の兄妹の人達を一所に遣る意だね。』

『さう。僕は強て干渉せん意だ。都根子さんが好意で誘引しようと云はれるのを、僕が不可いとは云へない。また柏木の兄妹が都根子さんの好意を喜んで、同行しようと云ふ樣だッたら、強て止めて其意志を束縛する意でもない、併し。其場合には僕も同行して、先づ君の宅へ送つて來るか、僕が一人君を訪ふかして、君に其事を知らせる意で居たんだ。』

『さうだ、さうして呉れたまへ。都根子を此處に引張つて來て呉れたまへ。蒼川君、君が然樣思つて居て呉れようとは知らんで、大いに失敬したよ。僕が更めて頼むから、是非引張つて來て呉れたまへ。』

『僕は其意だ。併し、』

勝彌は凝乎と紫瘦の顔を見た。

紫瘦は勝彌が云淀んだと思つたので、其併し以下には何樣な事があるのか聞きたくてならないので、稍急込んだ。

『君、君の云ふ事なら何でも聞く意だから、遠慮しないで云つて呉れたまへ。』

『僕は遠慮は爲ない。併し、君が都根子さんの感情を轉せしめるだけの覺悟を爲なきやア、結局以前見たいに平和な家庭の快樂を受ける事は出來ないだらう。』

『僕も然樣思つてるんだ。だけれども、僕が云つたんぢやア、天から都根子が受付けないから困る。』

『然樣でも無からう。君が眞實都根子さんを愛してる誠心を見せ得たら、都根子さんは喜んで、以前に等しい柔順な妻君になられるに違ひないと、僕は信じてるんだ。』

『然樣か知ら。』と、紫瘦は覺束ながりながら、『如何云ふ風に爲たら、僕の誠心を都根子に知らせる事が出來ようか、第一其手段からして、』

『手段なぞは無用だ。』

『だけれども君、』

『手段は一時を瞞過するに過ぎんのだ。君の誠心は永久的でなきやアならんのだから、都根子さんを何時となく、君の誠心に感じさせるんで無くちやア駄目だ。』

『そゝ其が君、如何すれば感じるかが問題なんだよ。』

『其問題は、唯君にして解決し得るもので、僕が啄を容すところぢやないと思ふ。』

『それが君、君は其樣事を云ふけれども、所謂局に當る者は迷ふと云ふ、奴で、僕には如何して可いか、眞箇分らないんだ。君に名案があるなら、談して見て呉れないかね。』

勝彌は態と紫瘦を窘めて、其眞心から悔悟せしめようと思ふので、尙ほ斯く〳〵せよとは敎へずして、深く考へて居るらしい樣子を見せて居た。

紫瘦は困じ果てた樣子だ。

『蒼川君、君が今夜都根子を連れて來て呉れた時にだね、都根子を如何に處すべきかからして、僕は迷つて居るんだ。』

『迷ふ事は無いぢやアないか。君の思ふまゝに命令すれば可いんだ。恐圖〳〵しないで

一刀兩斷に遣付けるさ。」

『困るなア、君は眞面目に相談相手になつて呉れないから。』

勝彌は覺えず笑つた。

『其位な事が出來ないなんて、而も夫が妻に對してなんだから、僕は殆んど信ずる事が出來ない位だ。何でもないちやアないか。花見に遣りたくないと思へば、行くなつて命令するだけの事だらう。遣つても可いと思ふなら、行けッて許せば可いんだ。君が一緒に出掛けたきやア、乃公が連れてつて遣るッて、唯一言で濟む事なんだ。』

『それは然樣だけれども、都根子が以前の都根子で無いんだから困るんだ。』

『それほどでも無いだらう。』

『如何して〳〵、僕が何か云へば直ぐに反抗する。』

『そりや都根子さんが不可い。』

『だからね、君を煩はすのは氣の毒だけれども、君から何とか云つて貰へまいかね。』

『それは可いがね、僕が云ふ事になると、また何樣間違つた感化を與へるかも知れないよ。』

勝彌が高聲に笑ふと、紫痩は苦笑を爲た。

『君、其樣戯言を云はないで、大いに說諭して見て呉れたまへな。』

『其時の成行に依つて僕から話を爲るとして、兎に角夕方また訪ねる事に爲よう。』

勝彌は軈て太田を辭した。

（二七）

勝彌は林國雄に殆んど十日近くも逢ふ機會が無かつたから、紫痩の家よりの歸途を牛込見附に取り、赤城下の其家を訪うて見た。生憎國雄が家に在なかつたので、其母と暫時談話をなし、軈て其處を辭して船町の柏木に歸つて來た時は四時を過ぎて居た。

勝彌が格子戸を開けると、元二が飛んで來た。勝彌は沓脱の見馴れぬ女用の草履を見な

から、

『元二君、太田の妻君が來てるね。』

『え、、先刻から先生の御歸宅を待つてお居でなんです。』

『さうか。』と、眉を顰せながら低聲で、『君に何か話があつたらう。』

『話ッて、櫻を見に行くッて事ですか。』

勝彌は首肯く。

『ありました。』

『さうか。』と、また眉を顰めた。『美都子さんは如何してるかね。』

『太田の奥さんとお話を爲て居ます。』

勝彌は座敷に來て見ると、都根子と美都子と相對して居た。

『先生、お歸りなさいまし。』と、美都子は出迎を爲なかつたのを謝するかの樣に、赤くした顔に其意を見せながら叩頭を爲た。

『御留守に伺つて、お待ち申してましたの。』と、都根子は微笑みながら會釋を爲た。

勝彌も會釋を返して、

『餘程お待ちなさつたんですか。』

『え、。』と、微笑みながら、『二時間ばかしお待ち申しましたは。』

『さうでしたか。』

『宅に今まで居らしッて。』

『いえ、お宅から林の宅へ廻つたんです。』

都根子は何か考へて居る樣子であつたが、

『宅を御歸り遊ばす時、太田は居まして。』

『さうです。』

『何處へか參る樣な事を申して居まして。』

『い、え、其樣事は聞きませんでした。』

『さうですか。』

都根子はまた考へて居る。元二も美都子も此前に既に茶の間へ行つて了つた。

『貴方、私が新見附で御目に掛つた事を、太田にお話しなさいまして。』
『話しました。』
都根子は話して呉れなければ可いにと云ひたげに見えた。
『御宅へ伺ふ事もですか。』
『さうです。』
『今夜の花見の事もですの。』
都根子が急込んで問掛けた。
勝彌は素知らぬ顔で、
『さうです。』
『まア。』と、眼を据ゑて勝彌を見た。
『話すのが當然だと思ひますから、話したんです。』
『ですけども……。』と、都根子は云淀みながら、『太田は何と申しまして。』
『太田君ですか。』

『花見に行くなら、自分も一緒に行くッて申しましたでせう。』
『さうは云はれなかつたのです。』
『何と申しまして。』
『紫痩君よりか僕が云つたんです、奥さんを君の宅まで御送りするからッて。』
『えッ、其樣事を仰有つて。』と、都根子は怨めしさうに勝彌を見た。
『さうです。それが當然だと思つたからです。』
『ですけども、私あんなにお頼みしましたでせう。』
都根子は頼甲斐の無い人だと云ひたさうに勝彌を見た。
都根子は直ぐに語を繼いで、
『私送つて戴かないでも、宅へ歸らうと思へば歸りますけれども、太田が無理にも私を連れて來て下さいて御頼したのなら、私決して歸宅ませんは。それでも、貴方は私を伴れて行らしッて。』
『貴女が歸らないとお云ひなされば其までじす。併し、貴女も御自分が何であるかと云ふ

事をお考へなさるが可いんです。」

『私が何であるかッて事を、私に考へろッて仰有るんですか。』

『さうです。』と、勝彌は力のある聲で、『貴女は太田君の妻君であると云ふ事を、眞逆忘れてお居でゝはありますまいな。』

『太田の妻つて事をですか。』と、都根子は伏目になつたが、直に眼を揚げて屹度勝彌を見た。『さうで御在ますね。太田はやはり私を自分の妻の意で居ますでせうが、貴方も私を太田の妻だと思つて居らつしやるでせうが、私の心は然樣でありませんのですから、』

『奥さん、何を仰有るんです。』と、勝彌は遮つて、『其樣事を口に爲さるとは、驚く外は無い。』

『ですけども、私の心が然樣思つてるんですから詮方がありませんは。』

勝彌が下墨む樣な眼をして凝乎と都根子を見ると、都根子は頭を傾げて眼を床の鉢植の草花に翦した。

『奥さん。』と、勝彌は暫時してから呼掛けた。『先日御目に掛つた時、御約束した事がありましたね。』

『如何な御約束でしたか知ら。』と、尙ほ草花に眼を据ゑたまゝだ。

『太田君と折合て下さる事です。』

『あの事なら、私には到底出來ませんは。』

『太田君を以前の樣に愛する事は出來ないと仰有るんですか。』

『はい。』と、垂頭く。

『いかんですか、僕が先日彼程御話したけれども。』

『貴方の御親切は誠に有難いんですけども、私太田の妻で居る氣になれませんの。』

『さう仰有れば其迄ですが。』と、勝彌は眉を顰せて考へて居る。

暫時は二人とも無言。茶の間にも話聲が爲なければ、咳嗽一つする者も無いので、人なき家の如く森として居る。

『久能木さん、もう今に暮れさうですから、お供致さうぢやアありませんか。』

都根子が斯う云つたので、勝彌は今更ながら都根子の女らしからぬ放肆に驚き、一喝し

たい程悄いと思つたけれども、有繋にさうも爲しかね、屹度其顏を見据ゑた。

『靖國神社にですか。』

『はい。柏木さんも美都子さんも御承知下すつたんですよ。貴方が御歸宅でしたら、直ぐお供致す意で、御待ち申して居たので御在ますよ。』

『僕は御免被りたい。』

『おいやなんですか。』

『僕は貴方と一緒に行く事は出來ない。』

『何故で御在ます。』

『何故と云つて、考へて御覽なされば解る事です。』

『私には解りませんは。』と、都根子は膝を進めた。

『僕は何處までも、貴女を太田の奥さんだと思ふから、太田君の承諾を得ない中は、花見に同行するなぞと云ふ事は出來ないんです。況て、太田君に貴女を伴れて來て呉れと頼まれたんです、僕も屹度御送りすると約束したんですから、此處から直ぐに花見に御同行する事は斷じて出來ません。』

勝彌が屹度した語調で斯う云ふと、都根子は凝乎と考へて居た。

『奥さん、僕は今日まで、貴女を其樣方とは思つて居なかつたんです。貴女だけが何とお云ひなさつても、今日では太田君の奥さんに違ないんです。それであるのに、夫が同行するなら花見には行かないの、夫に斷るには及ばないのと云つてお居でゝは、貴女は人の妻君としては尊むべき人では無い。僕は其樣人に同行する事は出來ない、斷じて出來ないんですから、貴方が是非行きたいなら、一人でお行でなさるが可い。柏木君もお供させる事は出來んです、僕が斷じて許さんです。』

都根子は伏目になつて聞いて居たが、勝彌を見上げた眼は輝き、顏は赫と赤くなつて、

『私は花見に行くだけの自由も許されて居ないんですか。』

『太田君が許して居ない事は、僕は能く知つて居ます。』

『いゝえ、太田からではありません。女には唯其だけの自由もありませんでせうか。』

『太田君の妻君としては、無論無いんです。』

『でも、私既う太田の妻ではありませんもの。』

『それは唯貴女が然樣云はれるだけで、僕は太田の奥さんとして貴女と交際つて居るんです。貴方が如何あつても太田君の妻君でないと主張なさるなら、尙々花見などに同行する事は出來んです。此家に居て戴くだけでも、僕は好ましくないんです。』

都根子はさも口惜さうに凝乎と勝彌を見て居たが、軈て何と思つたか淋しい笑を浮めながら、

『私が惡う御在ました。貴方の仰有る通、御一緒に宅へ歸ります。御迷惑でせうが、貴方も入らしつて下さいましな。』

『さう仰有れば、無論僕も御同行致します。』

『それから……。』と、茶の間を見返つて、『柏木さんも美都子さんも、切角御約束爲たんですから、御一緒にお入でを願ひたう御座んすが、』と、勝彌の顏を見る。

勝彌は稍躊躇いながら

『其は可いでせう。柏木君と美都子さんが御約束致したのなら、僕も强て止めない積りです。併し、それも貴女のお宅までゝ、花見にお供させるさせないは、紫瘦君の同意を得た上で決する事に爲たいんです。それを御承知なら、二人も僕と一緒に、貴女のお供を爲せる事に爲ませう。』

『それで結構で御在ますは。』

『では、然樣云ふ事に爲ませう。』

勝彌は元二を呼んで、

『美都子さんも差支が無きやア、靖國神社に同道したいから、君も急いで準備を爲て呉れたまへ。』

美都子は先程からの勝彌と都根子との談話を漏聞いて、一緒になら行きともない樣な氣が爲たけれども、元二が勸めるので終に行く事に極めて、軈て一同家を出た。

（二八）

机に倚れながらも、何となく心がいら〳〵して居るらしく見えた紫瘦は、手を伸して障子

を開けたが、蒼然たる暮色に唯庭をきよろ〳〵と見たのみだッたが、直ぐに手荒く閉めた。

『久能木が都根子を連れて、もう來さうなもんだ。夕方だと云つたのに、日は暮れて了ふぢやアないか。久能木にも似合ない、何を愚圖〳〵してるんだらう……それとも、都根子が久能木の宅へ行かなかつたか知ら……。』と獨語を云つたが、突如に大きな聲を爲て、『小川君、〳〵。』

『はい。』

水鏡は座敷に入て來て膝を突いた。

『君、洋燈を點けて呉れたまへ。家の中が暗くなるまで、火を點けないで置く事は大嫌だ。陰氣臭くッて不可い。』

『つい忘れて濟みませんでした。唯今洋燈を持つてまゐります。』

水鏡が應て火を點けた洋燈を持つて來て机に置くと、紫瘦は落着の無い眼で水鏡を見ながら、

『君、靖國神社の櫻花には、隨分な人が出るだらうね。』

『え、出ますとも。昨夜なんぞも人で埋る樣でした。』

『都根子には逢はなかつたかね。』

『昨夜ですか。いゝえ、お見掛申しませんでした。』

『彼女が昨夜歸つたのは、九時過ぎてたらう。』

『さうでした。』

『今日も未だ歸つて來ない。』

水鏡は晝間の勝彌と紫瘦の對談を聞いて居るから、都根子が未だ歸つて來ないのは勝彌の宅に話して居るからであらうと思つたけれども、自分が今都根子の爲に辯護する樣な語を出したら、目に見えるほどいら〳〵して居る紫瘦が何と云出すか知れぬと、それが氣味が惡い。

『もう御歸宅だらうと思ひますが、何なら其邊を見てまゐりませうか。』

『いや、其には及ばない。放擲らかしとくがいゝんだ。』

『ですけれども、』

『いゝよ。放擲らかして置きたまへ。』

『さうですか。』と、まじ〳〵と紫瘦の顏を見て居た。

机の上の置時計を見ると七時に近い。紫瘦は一入いら〳〵爲出した。

『君、靖國神社へ行つて見るから、一緒に來たまへ。』

『も少時お待ちになつたら何です』

『いや、待つ事はない。』と、紫瘦ははや立上つた。『久能木なぞが何を云ふか、信用が出來るもんか。』

『久能木さんが何か云はれたんですか。』

『いや、何でもない。君の知つた事ぢやない。』と、座敷を出ながら、『玉ッ……玉は居ないか。』

『お玉どん〳〵。』と、水鏡が高聲に呼ぶ。

お玉が臺所から出て來ると、常になく慳貪な調語で、

『乃公は小川君と一緒に散歩に行つて來るから、奥さんが歸つたら然樣云ふが可いぞ。』

『はい。』

紫瘦が玄關へ行くので、お玉は袖の下を摺抜けて、先へ行つて紫瘦の穿物を出した。

紫瘦は早くも格子戸の外に出たが、後から出ようとした水鏡を遮る樣に、格子戸に立掛つた。

『玉、奥さんは何處と何處へ行くと云つてたか。お前聞いて居やせんか。』

『お生家へとばかし仰有つてた樣で御在ます。』

『さうか。乃公は靖國神社に居るから、奥さんが歸つたら迎に來るんだぞ。』

『はい。』

『小川君、行かう。』

紫瘦は洋杖で地を敲きながら靖國神社へと急いだ。

お玉は家の内が急かに森としたので、淋しがりながら座敷の洋燈の火を細めたり、都根子の歸宅が遲いのを案じたりして、茶の間の火鉢の傍に徒空然として坐つて居ると、格子戸の開く音がした。

『奥さまだよ。』

お玉は獨語を云ひながら駈出して行つて玄關の障子を開けた。

『御在宅かね。』

勝彌が斯う聲を掛けた。其後には十六七の美しい娘の顏が白く浮いて見えた。

お玉は此方が噂に聞いた柏木さんの嬢さんであらうと、其美しさに驚きながら、

『旦那さまは、唯今小川さんと御出掛けなさいました。』

『さうかね。』と、勝彌は意外だと思ふ氣勢で、『何處へお行でかね。』

『靖國神社へ散歩に行くつて仰有いました。未だ靖國神社迄は行らッしやらない位で御在ますよ。』

『さうかね。』と、勝彌は美都子を見返つて、『紫痩君も靖國神社だと云ふから、直ぐに行つても可かつたんですね。』

『奥さんとお逢ひなさるかも知れませんは。』

『さうです。それにしても、一應此家に來る必要は有たんですよ。』と云ッて、勝彌はお玉に向ひ、『萬一彼方でお目に掛らない樣な事があるかも知れないから、御歸宅だつたら、御留守に私が御訪問したと云つてお呉れ。』

『はい、申上げます。』と、お玉は格子戸の傍まで下りて來て、『當家の奥さまにお逢ひ遊ばしまして。』

『私の宅にお訪でになつたから、其處の新見附迄電車で御一緒に來たんだが、奥さんは直ぐに靖國神社へ行くとお云ひなすつたから、私は其事を斷りに來たのなんだ。併し紫痩君も靖國神社へ行かれたのなら、多分彼方でお逢ひだらうと思ふね。』

『それだとよろしう御在ますけれども。』と、お玉は脊伸を爲て、勝彌の後の美都子を見たがりながら、『御上り遊ばして、お茶でも召上つて居らつしやいまし。』

『いや、私達も靖國神社へ行くんだ。』

『では御歸途に。』

『難有う。一人で留守居は淋しいだらうね。』

『そんなでも御在ません。』と、お玉は微笑む。

『では、よろしく頼むよ。美都子さん、行かうかね。』

『何卒お歸途に。』

勝彌と美都子はお玉に見送られながら、路を蛙原に取り靖國神社へと行つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

都根子は勝彌等と共に柏木を出る時は、一應我家に歸る意になつて居たが、新見附で電車を下り、新道を東へ渡つて、我家は直ぐ其家である、夫が何と云ふであらうかと思ふと、俄に我家に歸るのが可厭になつた。で、路を土手に沿うては取らず、眞直に行かうとしたので、勝彌は驚いて聲を掛けた。

『奥さん、其方へお行でゝは廻路でせう。』

『迂廻ッたつて幾許でもありませんは。』

『ですけれども、紫痩君が待つてられる筈ですから、』

『其樣に仰有らないだつて能う御在ますは。宅へ歸つて、太田が許すの許さないのッて申しますと面倒ですから、靖國神社へ廻つてから歸宅たう御在ますは。』

『其樣事をお云では困るですな。』

『いゝぢやアありませんか、其樣に仰有らないだッて。』

都根子は斯う云捨て尙ほ路を變ずに行かうとするので、勝彌は心の中に怒りながらも、元二の耳に口を附けて、都根子を見失はない樣にして、成るべく池の畔を遠く去らしめざる樣に爲て居て欲いと命じて、自分は美都子を伴ひ、太田の家へと行つたのであつた。

都根子は勝彌と美都子の姿が見えなくなると歩を止めて、元二が側に來るのを待つて居た。

『柏木さん、久能木さんと美都子さんは如何なさいまして。』

都根子は元二が傍に來た時、其と知つて居ながら態と聞いて見た。

『先生ですか。先生は御宅へお行でになッたんです。』

『美都子さんも御一緒。』

『さうです。』

『貴方は如何して御一緒に行らッしやらなくッて。』と、笑ひながら元二の顔を見る。
『僕ですか。』とばかりで、後が云へずに顔を覗くした。
『仰有らなくたッて私知つて居ますは。』と、微笑を含んだ顔を斜にして元二を見ながら、
『私が何處かへ行つ了はない樣に附いて居るんだつて、久能木さんにお命せられなすつたんでせう。ねえ、然樣でせう。ほゝほ。的中つたでせう。』
元二は顔を一入赧くしながら、
『そんな事はありません。』
『まア、』と、呆れた樣な顔をして元二を見ながら、『貴方隱す事御上手ですのね。』
『いえ眞個です。』と云つた元二の顔は、困つた餘に紅の樣になつて、羞を含んだ眼が鋭く輝いて居た。
『貴方御怒りなさつちやいやよ。今のはね、私串戲に烏渡云つて見たんですからね、氣に掛けないで頂戴よ。』
元二が尙ほむつとした樣な顔を爲て居るので、都根子は氣の毒になつた。

『柏木さん、今のは眞個戲言ですのよ。貴方が本氣に受けて下すつちや困ッ了つてよ。私謝罪つても可いんですよ。』
『其樣事を爲さることはありません。僕は其位な事で怒りも爲なければ、また怒る譯もありませんのです。』
元二は勉めて語調を靜めて斯う云つたけれども、心の中では可厭な事を云ふ婦人だと思つて居た。
『然樣仰有つて下さると、私嬉しう御座んすは。早く參りませうね。』
都根子は駢ぶ意で歩出すと、元二は其後に從いて行く。
『柏木さん、』と、都根子は未だ十歩ならずして歩を止めて、『貴方私と駢んで頂戴な。そでないと御話が爲難う御座んすは。』
『僕は話を爲る事は下手なんですから、』
『あら、彼樣事を仰有つて。私と駢んで居らッしやるのは、外聞が御惡いんでせう。』
『そんな事は無いんです。』

『ちやア、駢んで頂戴、私貴方には種々御話がゐるんですよ。』

元二は詮方が無さに都根子の左手に駢んで歩んだ。

既に日は暮れて、互の顔が白く見ゆるばかりで、電話交換所の角を左に屈ると、靖國神社の裏門の方には電燈の光に映えた櫻花が浮いて見えた。

『まア綺麗ですこと。』と、都根子は斯う云ひながら、無意識元二に袖が觸れるまで寄添うた。

『實に綺麗ですな。宛然繪に畫いた樣ですな。』

『眞個ですは。』

二人とも覺えず歩を疾めると、肩と肩と摺合ふのに元二が先づ氣付いて、はッと一間ばかり離れた。

『柏木さん、如何なすつて。』

『如何も爲たんぢやありません。』

『だッて、可笑いはねえ、急に其方へ行つてお了ひなすつて。』

都根子も此時は既に氣付いて居たので、態と斯う云つて見たのだ。

元二は默つて歩いて居る。

靖國神社の裏門を入つて、路を左に取り、池の畔へ行く角迄來ると、都根子は俄かに歩を止めた。

『柏木さん、一寸待つて頂戴。』

元二も歩を止めた。都根子はちら〳〵と散る花の木蔭の暗き方へと身を潜めながら、彼方此方と頻りに見透して居たが、何を認めたのか、覺えず聲の調子を外しながら、

『あら彼處に……お、小川が前に立つて來てよ……柏木さん、此方へ行らッしやい。』と、周章た態度で、元二の袖を捕へて曳きながら、『早く行らッしやいよ、さア早く。』

元二は成るべく池の畔に居る樣にと勝彌から命せられて居るので、袖を曳れながらも、

『其方は櫻花が尠いんですせ。池の畔から遊就館の方に多いですから、池の方へ行ッしやッちや如何です。』

『池の方へは後で行きますから、後生ですから此方へ來て頂戴よ。早くですッて云ふの

に。』

『ですけれども、』

『來て下さらなきや能いは、私一人行くから。』

都根子は怨と怒とを帶びた聲で斯う云ひ捨て、小走に小暗い梅林の中へと行くのであつた。

『奥さん、お待ちなさい。奥さん、奥さん。』

元二は都根子を見遣つては一大事だと思ふので、後から呼掛け〳〵追縋ると、都根子は尙ほ梅林へ深く深く紛入りながら、

『大きな聲を爲ないで頂戴。大きな聲を爲さると、私貴方を怨んでよ。』と、僅かに踏止まつて後を見ながら、『辛と見えなくなつてよ。』

『何が見えなくなつたんです。』

『何でも能う御座んすから、私と鳥居の方へ來て頂戴。』

『鳥居の方へですか。』と、迷惑さうで、『僕は池の畔で久能木先生を待合はす約束ですから、』

『ちやア、貴方お一人で池の畔へ入らッしやい。私此處でお別れしてよ。』

都根子が行掛けると元二は周章ながら、

『奥さん、一寸待つて頂戴。後で池の畔へ行らッしやるなら、鳥居の方へお供を爲ても可いんです。』

『後でなら行つてよ。』

『では、お供しませう。』

『ちやア、先刻の樣に駢んで頂戴な。』

都根子は元二が駢ぶのを待つて歩を運びながら、

『柏木さん、貴方はやッぱし何ね、久能木さんに命かつて、私を逃がさない樣に附いて居らッしやるのね。』

元二は然とは云ひかねたが、然で無いとも云ひかねて、急には返辭を爲し得ぬ。

『だけども、久能木さんは眞箇親切な方ですのね。私の事を此樣に迄心配して下すつて、

態々貴方を附てお置きなさるんですもの、私が此樣に逃げて歩いたりしちや、久能木さんに對して濟みませんはね。柏木さん、貴方こそ本當に御迷惑ですはね。」

『僕は迷惑な事なんかありませんけれども、久能木先生が池の畔をお探しなさるだらうと思つて御氣の毒です。』

『それは然樣ね。ですけども、』と暫時考へて、『私後で御詫を爲ますから、貴方が惡く思はれなさる樣な事はありませんは。』

『さうかも知れませんが、奥さん、池の畔へ行ッて下さる譯に行かないんですか。』

『今は何ですから……今少時過つてからに爲て下さいな。』

何時か鳥居の外に出て、櫻花を見返る樣になつて居た。

都根子が池の畔を避けたのは、云ふまでもなく紫痩と水鏡の姿を彼等に氣附かれぬ前に認たからで、梅林に紛込むこと今一歩遲かりせば、紫痩の前に立つた水鏡の眼を逃れ得なかつたかも知れぬ。

紫痩も油斷なく遠く近く眼を配りながら、池の畔まで來たけれども、都根子らしい女にも逢はねば。久能木らしい男も見掛けない。

『小川、まだ久能木も來て居ない樣だね。』

『さうです。僕は先刻から一生懸命注意してるんですが、どうも見掛けませんね。』

『未だ來て居ないんだらう。それとも、宅の方へ先に行つたかも知れないね。』

『或は然樣かも知れません。』

『けれども、宅に來れば、玉が直ぐ知らせに來る筈なんだ。暫時此邊で待つてる事に爲ようか。』

『それが可いでせう。』

紫痩は袂から敷島を出して、自分まづ一本を拔取り、袋を水鏡の手に觸れながら、

『君、一本取らないか。』

『莫ですか。頂戴します。』

紫痩は燐寸を摺つて先づ自分が吸付け、水鏡にも點けさせて、

『或ひは都根子が久能木の宅へ行かなかつたかも知れないね。さうでも無いと、此樣に遲

い譯は無いんだからね。』

『それも然樣ですな。』と、水鏡は莨を吹かしながらもきよろ〳〵眼を配つて居る。

『夕方來ると云つたのが、今迄來ないところを見ると、都根子が久能木へ行かなかつたかも知れない。どうも然樣らしい。久能木は眞面目な男だから、都根子が行きさへすれば屹度引張ッて來るに違ひないんだから。』

『お、彼處にお居でゝす。』

『え、來たッて。』

水鏡は彼方の梢繁き櫻花の下の、電燈の光に遠く三五の人影を目掛けて突と進み寄り、其人ぞと思ふ婦人の顏を差覗きながら、

『奥さん、』

『あら何方。』

避けながら見返つた女の顏は、膿げながらも都根子とは似ても似付かぬ、年さへ四十近い大年增であつた。

『あッ違つた。失敬〳〵。』

水鏡が人違の失敗に背後から、どッと笑聲を浴びせられ、這這の體で逃げて來ると、紫瘦は苦笑を爲ながら、

『人違を爲たのかい。』

『え、、違ひました。』

『だめだ。行かう。』

『今少時お待ちなすつては如何です。』

『待つてたところで、來なきや滿らんぢやアないか。行かう〳〵。』

紫瘦は其でも以前來た路へは返らず、前に都根子が紛込んだ梅林を右に見、左に社殿に沿ひながら、ぶら〳〵歩の後から、水鏡が尙ほ油斷なく往來の人々に注意を怠らずに居た。

水鏡が何したのか聲高に笑出したので、紫瘦は覺えず歩を止めた。

『何が可笑いのかね。』

『は、は、、、。昨夜可笑かつたですよ。丁度此奥の處で。』と、梅林の中を指しながら、

『兒玉とお須壽を驚かして遣つたんです。はゝはゝゝは。』
『お須壽と云ふのは、久能木が前に下宿して居た山田の娘だらう。』
『さうです。それは面白かつたですよ。』
『満らない、行かう〳〵。』
紫瘦が相手にならないので、水鏡は柏子拔がしながら後に從いて行く。
勝彌が美都子を伴うて池の畔に來たのは、紫瘦と水鏡が梅林より社殿の前の方へと通過ぎた頃の事で、紫瘦等が都根子等に會ひ得なかつたのに同じく、僅かに一歩の差と云つて可い。
『美都子さん、人は澤山居るけれども、元二君や太田の妻君らしい人は見えない樣だね。』
『然樣で御在ますのね。途中でもお見掛申さなかつた樣で御在ますよ。』
『然樣です。僕も隨分注意して居たが、太田にも出會さなかつた。』
『兄は池の畔で御待ち申してる筈ですのに。』
『併し、兄さん單獨で無いんだから、さう行かなかつたんでせう。まア暫時休む事に爲よう。貴女草臥は爲なかつたかね。』
『いゝえ。』
『彼の四阿の腰掛が明いてる。』
勝彌は美都子を四阿の内に伴ひ、『お掛けなさい、僕も掛けるから。』
美都子は草臥れたと云ふのではないが、勝彌に命ぜらるゝまゝ腰掛に腰を却しながら、斷えず四方を見張つて居た。
『美都子さん、貴女は太田の妻君の態度を――別して今日なぞの態度を如何思ふですか。』
と、紙卷莫に燈木の火を點つす。
美都子は何とも返辭を爲ぬ。
『女が如彼ちや不可ですな。人の妻君としては別して不可ですな。貴女は事情を知んかも知れないが、また知る必要も無いのだが、太田の妻君の樣では、貴女を交際させるのも僕は可厭なんだ。彼の妻君ばかりを咎める譯には行かない、太田が惡いからして妻君が如彼に成つたのだけれども……夫が夫なら妻も妻なんだけれども、妻が夫に對して彼樣態度を

取ると云ふ事は無い。美都子さん、僕が其間の事情を委しくお話しする時が來るかも知れないが、太田の妻君が今後も今の態度を改めない樣だつたら、貴女は交際を避けんきやア不可いよ。一旦夫として侍いた以上は、假令夫に缺點があらうとも、直ぐに愛想が盡きた樣な事を云つたり、夫に反抗したり、自暴自棄に陷る樣な女は、妻として最も卑む可きだ。夫に缺點があれば諫るが可い。口で諫めて聞かれなかつたら、身を捨てゝ諫めるが可いんだ。此樣事を云ふと、時代の新思潮が如何の斯うのと云ふ奴は眉を顰めるかも知れないが、僕は女は然樣あるべきものだと信じてる。美都子さん、貴女には何の關係も無い事だけれども、女は誰にしても、確乎した覺悟を有つてなきやア不可いから、唯參考までに云つて置くんですよ。』

美都子は謹んで聞いて居たが、隣の腰掛に突如に腰を却した者があるので、吃驚して腰掛を放れて勝彌の背後に避けた。

勝彌も立上つた。

『まだ見えない樣だから、社の前の方へ行つて見よう。』

勝彌が美都子と四阿を出て、池の畔へ二三歩近歩つた途端に、

『久能木先生。』と、突如に聲を掛けたものがある。

見ると其は小川水鏡だッた。

『久能木先生、先刻から非常にお探ねしたんですよ。』と、彼方を見返つて大きな聲で、『先生、紫痩先生、此處に久能木先生が御居でいすよ。先生、先生。』

彼方に居た紫痩は水鏡に呼ばれて、二三の人の肩に肩を打當てゝ、罵らるゝのも耳には入らず、勝彌の傍に來るより、

『君、都根子は如何した。』と、喧嘩腰かとも思はるゝ語調で問掛けた。

『僕も都根子さんと君を探して居たんだ。』

『なに、君が僕や都根子を探して居るんだッて。君は判らない事を云ふね。』

『解つても解らなくッても、其が事實なんだ。』

勝彌は都根子を送つて新見附まで來ると、都根子が家に歸る前に靖國神社へ行くと云出して何と諫めても聞入れず、果は自分一人別れて行くとまで云ふので、止を得ず元二を附

けて其處に手を分つた事から、自分は美都子と共に紫瘦の家を訪ひ、留守居の下婢から紫瘦等も靖國神社へ行きたりと聞き、直ちに此處へ追て來て探したけれども誰にも逢はず、今また所を變へて探す意で居た事まで語了つて、

『……して見ると、君もまだ都根子さんに逢はないんだね。』

『都根子に逢つて、君に聞く奴があるもんかね。』

『それは然樣だ。はゝは。』と、勝彌は堅えず輕く笑つて、『池の畔に居る樣にッて、僕は元二君に命じて置いたんだよ。併し、』

水鏡は傍から口を出して、

『柏木君も一緒に雲隱れだから妙だ。』

『何が妙だ。』と、勝彌は直ぐに聞咎めて、『小川、君と柏木と同一に見てるのか。其無駄な口を利く手間で、探すが可いんだ。』

『ですけれども先生、』

水鏡が辯じようとしたのを、今度は紫瘦が制して、『君は默つてるが可い。都根子が此處に來てる事だけは、兎に角明瞭になつたんだから、尙ほ探すより外詮方が無い。蒼川君、君には御氣の毒だがね、僕は今一度探して見たいと思ふから、手を貸して呉れたまはぬか。』

『無論共に探すさ。』

『先生、』と、水鏡は紫瘦に對ひ、『先刻から彼樣に探したんですから、尙だ此處に居らッしやるのなら、如何しても御目に掛らなきやアならないと思ひますね。それが御目に掛れないとこを見ると、もう御宅に歸つて居らッしやるのかも知ませんよ。』

『或は然樣かも知れない。』と、勝彌も云ふ。

『さうかも知れないけれども、僕は今一度探さなきや氣が濟まない。蒼川君、手を貸して呉れるだらうね。』

『よろしい。』

『小川、君は梅林の方から社殿を廻るんだ。僕は蒼川君と遊就館の前へ探して行くから、鳥居の前で待合せるんだよ。都根子に逢つても逢はなくても、待合せるのは鳥居の前だよ。いゝかね。』

『それは可いんですが、僕は一人發意ですね、先生方の方は美都子さんとも御三人で。』

紫瘦は初めて美都子が傍に居たのに氣付いた。

『美都子さん、些とも知らないで失敬しました。』

美都子は會釋を爲た。

『御氣の毒ですが、貴女も御一緒に行らしッて下さい。』

『はい、お供致します。』

『難有。』と、水鏡を見返つて、『注意して廻つて呉れなきやア不可よ。』

『おや〳〵、いよ〳〵一人發意か。』

水鏡が梅林の方へ行つたので、紫瘦も勝彌と美都子を促して鵜目、鷹目群集の人の顏を一人も漏さじと物色しながら、花に浮る〻長閑な人の中を突切り〳〵、早くも遊就館の前に來たけれども、終に其らしい姿さへ認め得なんだ。鳥居前には或ひは水鏡が探し得て待つて居るかも知れぬと、軈て其處へ行つて、此處でも依然一人發意の水鏡の姿を望んだ時には、紫瘦は落膽した。で、一入氣がいら〳〵して來て、頻りに杖で地を敲くのであつた。

都根子は夫の紫瘦を避けて、鳥居前より九段坂の上へと脱れて來た。心ならずも附いて居る元二は、勝彌に池の畔に待ち居る樣にと命せられて居るのも氣に掛るから、幾度となく都根子を勸めて、社殿の方へ引返さうと爲たけれども、都根子は不得要領な答のみして、今や坂を降りようとするのである。

元二はひたと歩を止めた。

『奥さん、何處まで行かうと云ふんです。』

『何處へだッて可いぢやありませんか。貴方、まア默ッて行らッしやい。』

『いえ、坂をお降りになるなら、僕は此處でお別れします。』

『可いぢやありませんか。其樣事を仰有らないで、一緒に行らッしやいよ。』

都根子が元二の手を取らうとしたので、元二は慌き避けて、

『僕は此處でお別れします。久能木先生が奥さんにお附き申してる樣にッて仰有ッたから、僕は此處まで御一緒に來たんですけれども、』

『ですから、私と一緒に來て下さるが可いは。』

『いゝえ、靖國神社の境内だけなら御供も爲ますけれども、其以外には御免を被ります。失禮します。』

『あらッ、待ッて頂戴。』

都根子は既に歩を返した元二に追縋つて、

『貴方も剛情だはね。』

『奥さんこそ剛情です。』

『私も剛情だッたけども、』と、都根子はひたと元二に體を駢べて、急に機嫌を迎る樣な調子になッて、『私惡う御座んしたは。貴方免して頂戴な。』

元二は少しく離れながら、

『免すの免さないのッて、奥さんが僕にお謝しなさる事はありません。僕は久能木先生に命せられてる丈の事をすれば可いんです。併し、際限もなく奥さんのお供を爲る譯には參りませんから、僕は此處でお別れするんです。唯それだけの事なんです。』

『貴方お怒りなすッたのね。』

『怒ッたッて爲樣がありません。僕はお別れすれば可いんです。』

『其樣に怒らないで頂戴な。』と、都根子はまた體を駢べて、『私貴方の仰有る通に爲ますから、ね、怒らないで、能う御座んすか。』

元二は默つて居る。

『柏木さん、私貴方の爲さる通に爲てよ。貴方の行らッしやる方へ行ッてよ。え、何方へ行らッしッて。』

『僕は社内の池の畔へ行ッて、久能木先生にお目に掛らなきやアなりません。先生は屹度僕を探してゐらッしやるでせう。』

『池の方へ。』と、都根子は眉を顰せて、『久能木さんばかしなら可いけども、太田が居るでせう。』

『居らッしやるかも知れません。』

『だから私逃げて來たんだのに。』

都根子は其處に佇んで凝乎と考へて居たが、軈て沈んだ語調で、

『柏木さん、私宅に歸りますは。濟みませんけども、貴方宅まで送ッて下さらなくッて。』

『お宅へですか。』

『えゝ、然樣。私貴方と御一緒に歩いてる中は、何にも忘れてますけども……池の方へなんか如何しても氣が進まないんですよ。後生ですから、宅まで御一緒にね。』

元二は可厭でならないけれども、都根子を其家に送届けて置いて、直ぐに引返して池の畔へ行き、勝彌に復命する事にすれば差支は無いと思つたので、終に都根子の乞を容れて其家の方へと伴はれた。

家に歸れば、今夜の中に早かれ晩かれ夫に逢はなければならないのに、暫時でも避け得らるゝ丈は避けたいのか、都根子は鳥居前より蛙原に取るべき路を裏通へと變へ、宮樣横の小路から我家近くへと歸ッて來た。

都根子は呟く樣な小聲で元二に對ひ、

『柏木さん、一寸此處に待つて、頂戴。』

元二を十間ばかり此方に待たせて置いて、都根子は足音を忍んで我家の門近くへ歩寄つて、家内の樣子に耳を澄して居た。

森として居るのは、夫はまだ歸らぬらしい。玄關の障子には火光が映つて居るけれども、それも極めてぼんやりして居るのから思ふと、水鏡の机の上の洋燈が心を細めてあるので、一層夫が歸つて居ないのを證據立てゝ居る。此程靜かなのは、お玉が唯一人て留守居を爲て居るのであらうと思ッた途端に、高く欠伸を爲たのはお玉だ。

『玉……玉。』

都根子が二聲三聲呼ぶと、お玉は飛んで出て來た。

『御歸り遊ばせ。』

『お前一人なんだらう。』

『えゝ。』と、土間に下りて來て格子戸を開けながら、『旦那さまにお逢ひ遊ばしまして。』

『いゝえ。』
『奥さまは靖國神社に居らッしやッたんでせう。』
『あゝ。』
『旦那さまも、小川さんと御一緒に、靖國神社へ行らしッたんで御在ますよ。』
『さう。』
『其から久能木さんが、旦那さまが御出掛遊ばした直き御跡へ入來ッしやいましたよ。御美しい御嬢さまをお伴れなさいまして。』
『さうかい。』
『何て御美しいんでせう。』
都根子は微笑みながら、
『彼處に御兄いさんが來て居らしッてよ。』
『えッ、柏木さんで御在ますか。』と、お玉は格子戸の外へ出た。
『お前は、柏木さんをお伴れ申して來てお呉れ。』

『あらッ、きまりが惡う御在いますは。』
『玉は、まア可笑いは。』と、笑ふ。
『あらッ、お笑ひなすッちや、尚ほきまりが惡う御在ますは。』と、袖で口を押へながら、
『唯お入來遊ばせッて申しますの。』
『唯それだけさ。一寸入來しッて頂戴ッて。』
お玉は軈て格子戸前に元二を迎へて來た。
『柏木さん、一寸入つて頂戴な。』
『いえ、僕は此處でお暇します。』
『せめてお茶だけでも、』
『久能木先生がお待ですから、また伺ひます。』
『まア能う御在ますでせう。久能木さんは今玉を御迎に上げる意ですから、宅で御待ちなすッた方が能う御座んすは。でないと、途中で行違にお成りですは。』と、元二を止めて置いて、『玉や、お前靖國神社へ行ッて、久能木さんをお伴れ申してお呉れ。柏木さんが宅に居

らッしやる事を申上げなくッちや不可いよ。」

「はい、直きに行ッてまゐります。」

「鳥渡お待ち。」

都根子は元二と四五歩離れて、何やらお玉に呟いた。

「早く行ッて來てお呉れ。」

お玉は直ぐに駈出して行つた。

「僕は久能木先生と御一緒に伺ひます。」

都根子は早くも元二の袂を押へて、

「お茶位召上ッて下すッたッて可いでせう。それとも御可厭ですの。」

「そんな事は無いですけど、」

「ぢやア、私の願を聞いて下すッたッて可いは。」

元二は自分でも乃公は何故此樣に氣が弱いのかと訝りながらも、都根子に勸められるゝまま其家に入ッた。

「柏木さん、失禮ですけども此方へ入らしッて頂戴。座敷ですと何ですか、親密でない樣な氣がしますは。」

都根子は元二を茶の間に請じ、長火鉢の傍に座布團を敷いて、

「貴方、御寒う御座んすから、此處に居らしッて頂戴。」

「僕は些も寒い事はありません。家外で風に當つて、急に家内に入つたんで上氣せたのか、くわッくとして此樣に汗が出てる位です。」と、元二は實際汗ばむで居る額を手巾で拭きながら、「それに時候が第一、もう火鉢に親むでもないですからな。」

都根子は元二の顔を見て唯微笑むだ。元二は馬鹿にでもされた樣な氣がして面白くない。

「粗茶ですのよ。」と、都根子は茶を進める。

「難有う。」

元二は茶を受けて飲みは飲んだが氣が落付かないので、他見にも其と知らるゝほどもちくして居た。

都根子は斷えず微笑みながら元二を見て居たが、自分も湯呑を取上げて一口飲み、頭を

傾げて、

『久能木さんは何せ宅にお寄りなさるんですから、落付いて居らしッて頂戴よ、もう玉も歸りますでせうよ。』

折柄表に女らしい足音が聞こえたが、お玉ではなかつたのか行過ぎて了つた。

『柏木さん、』と、都根子は改まつた呼方をしたが、直ぐに微笑むで、『貴方御幾歳で居らッしやいましたつけ。』

『僕は十九になつたんです。』

『ぢやア、私と一歳違の弟さんですはね。』

『奥さんは廿歳ですか。』

『御婆さんでせう。』と、微笑む。

『其樣事があるもんですか。丁度其位にしきや、御見えなさらない樣です』

元二は都根子を廿歳とは思つて居なかつた。もう二ッ三ッ年長に見て居たけれども、斯う云つて見たのだ。

『あら、彼樣事を仰有つて。ほゝほ。柏木さんも御世辭が可いのね。』

『御世辭ぢやないです。ですが、實を云ば、今一歳位お年長かと思つてました。』

『それ御覽なさいな。』と、態と串戯らしく睨んで見せたが、心の中では一歳でも多く見られて居たのが氣に掛つた。

『私今一度美都子さんの年に成つて見たう御在んすは。美都子さんは、確か御十七でしたはね。』

『ですが、美都子だッて、譯なく貴方の年になつ了ふんですから、年が二ッやそこら少だッて長だッて、何でも無いぢやアないですか。』

『殿方なら然樣ですは。』

『いゝえ、男が此時代に三歳違ば非常な事なんです。僕なんざ、再來年は否でも應でも兵役に就なきやアならないんです。兵役に就くのが可厭だと云ふのではありませんが、今の無學な僕が、二年なり三年なり、兵營に過ごす事になると、學問をする時機を失ッて了はなきやアならないんで、其が殘念なんです。ですから、僕がもう三ッ年が若くッて、今年十六

でしたら、六、七、八、九、十と徴兵適齢まで五年あるんですから、其間に何とか手段を講じますけれども、』と、覺えず肩を落して太息を吐いた。

『學校にお入りなされば何でもありませんは。』

『宅の事情が容さんから詮方がありません。』

『中學の學資位なら如何にか成りさうなものですね。久能木さんに御相談なすッて。』

元二は默つて居た。

都根子は自分でも不思議だと思ふほど頃日元二が好きになッて居る。で、其不如意な述懐を聞いたので、自分の同胞か何かゝ苦しんでる樣な氣がして、尋常一樣の同情を通越して共に心配せずには居られない。

『久能木さんに御相談なさるのは御可厭なの。』

『其樣事はありません。併し、先生は僕の宅に居らッしやる樣になッてから、總ての事に御同情なすッて、一方ならぬ負擔を爲て居て下さるんですから、其上僕の學校の事までも御心配を願ふのは、餘り御同情に狎れる樣で厭なんです。』

都根子は頻りに首肯いて、

『さう伺ふと御尤ですは。久能木さんの事ですから、貴方が御相談なさりさへすれば、屹度引受けて下さるでせうけれども、貴方の御身になると、御遠慮なさるのも御無理はありませんは。ですけども、如何かなさらなきやアね。』と凝乎と考へた。

『運命なら詮方がありません。』と、投出した樣に云ッて吻と太息を吐いた。

『私が此處を出る事にさへなれば、如何にか爲ますけども。』と、都根子も太息を吐いた。

暫時は二人とも默ッて居た。元二は都根子が心から此家を去る氣で居るらしいのに驚いて、凝乎と其顏を見ると、都根子は垂頭きながら深く考へて居る樣子だ。

『柏木さん、』と、都根子が突と顏を上げて元二を見た眼は輝く樣で、堅く決心したらしい語調で、『貴方、心配なさらないが能う御座んすよ。女の癖に生意氣な事を申す樣ですけども、私屹度貴方の御希望を遂げさせてよ。』

元二は唯眼を睜ッて居るのみだ。

『私何れ此家を去る意ですから、其から何を爲ようと私の自由ですは。生家は左や右爲て

居ますけども、生家から如何ッて事は出來ないかも知れませんけども、私が何樣にでもして……小學校の敎員になッたッても、貴方の學資位なら如何にかなりますは。』

元二は都根子が何故に斯くまで自分に同情を寄せて呉るのか、からして第一解らぬ。本氣で云ッてるかさへ疑はれる。けれども、其樣子は如何にも眞面目で、戯言らしい口氣は些しも見出せない。で、何となく氣味惡くも思はれて來て、返辭をするどころか、唯さじまじ都根子の顏を見て居るのみだ。

都根子の頰は何時か微紅く染められ、眼は潤を持つた、

『柏木さん、其代には私もお賴がありますのよ。』

『え、何ですか。』と、元二は覺えず身を堅くする。

『私此家を去る事になりますと、まア世を捨てる樣なもんですは。それはね、一生淋しく送る覺悟は爲て居ますけれども……けども何ですは、一生お友達もなくッて送るのは隨分苦痛ですは。ですからね、貴方私の一生の御友達に……同胞だと思ッて下すッても結構よ。私が年が上だから姉さんだけども、なんなら妹の方が可いんですけれども……ほゝほゝ、貴方、嘘ぞ怪しな女だとお思ひなさるでせうね。だけども、私眞箇心から申してるんですから、貴方も眞面目で聞いて下さらなきやア可厭ですは。私眞箇さう思ッてますのよ。此家を去れば唯貴方を……兄さんなら世間から批難される理由はないでせう。私さうなれば、今よりかも何樣に幸福だか知れませんは。私は屹度蓋しますから、貴方も……ね、能う御座んすでせう。』

都根子は云過た樣な氣もすれば、まだ何か云足りない樣な氣もして、搔いところへ手が届かない樣で、それで何か樂しい事が見えて居るかの樣にも思はれるのだ。

元二はます〳〵體が堅くなッて、兩手を膝に確と突いて、伏目にした眼をあらぬ方へ弱して居た。

『柏木さん、貴方今私が申した事を聞いて居て下すつて。』

都根子が元二の顏を凝乎と見ると伏見になつた。

『はい。併し、僕は貴女に然樣迄して戴く理由も由緣もありませんのです。御同情下さる御厚意だけは深く謝しますけれども、貴女に學資を惠ぐんで戴く事は御免を被ります。』

『ちやア、御否なんですはね。』と、本意なげに元二を見ながら、『柏木さん。』

『はい。』

『私如何したんですか、貴方も美都子さんも、私と何か深い因縁があるんぢやアないかと思はれてならないんですよ。何故さう思ふのかと仰有つても、私には其が解らないんですから説明の爲樣がありませんけども、唯ねえ、何と申す事は無しに御慕ひ申す氣になりますのですよ。ですから私、一生貴方と美都子さんの御友達に爲て戴きたいので御在ますの。私が此樣事を申すと、貴方は信じて下さらないかも知れないけども、永い目で見て居て下されば、屹度お解りなさる時がありるでせうよ。柏木さん、私が此樣に申しても、貴方信じちや下さらないんでせうね。』

元二は何と返辭を爲て可いか分らない。唯友人として交際して呉れろと云ふだけの事なら、返辭を爲るのに難しくは無いけれども、都根子の云方が云方だから何とも云ひ得なかつたので、今の語に對しても返事を爲得ないで居た。

都根子は瞬もせずに元二を見詰めて、其返辭を待つて居たが、軈て眼に潤が見えると、聲が稍顫へた。

『私貴方に嫌はれて居るんですは。爲方がありません。』と、手巾を眼に當て、鼻汁を啜る音をさせた。

『其樣事を仰有つちや困るです。』

元二は體を堅く〳〵して當惑爲きつて居る。

『いゝえ、嫌つて居らしッてよ。もしか、然樣でないとしますとね、』

格子戸ががらりと開いて、お玉が大きな聲で、

『旦那樣が御歸り遊しました。』

都根子ははッと驚いたが、直ぐに落付拂つて、眉を顰せながら返辭もせぬ。

座敷には早くも火光が見えたのは、水鏡が玄關の洋燈を持つて來たらしい。

『燐寸が見付つたから、此室の火は私が點けるから、君は其洋燈を玄關へ持つて〻呉れるが可い。そして、久能木君と美都子さんに上つて貰ふんだ。』と云つたのは紫痩で、燐寸を擦る音が聞こえた。

水鏡の玄關へ行く足音が聞こえた時、元二ははや腰を立てゝ、

『奥さん、お暇致します。』

都根子も今は止やうとも爲ない。元二は茶の間から直ぐに玄關へ出て行くと、勝彌が水鏡に問うて居るところだ。

『柏木は來て居ないかね。』

『如何ですか。』と、水鏡は洋燈の火で沓脱の上に見慣れぬ薩摩下駄があるのを見て、『來てお居でかも知れません、お玉どん、柏木さんが來てお居でだらう。』

お玉は都根子の命で探しに行つて格子戸の前まで歸つて來ると、端なくも紫痕等に出會つたので、どぎまぎしながら早くも都根子に聲を掛けて、自分はまだ内に入り得ずに居たのである。

『如何ですか。もう御歸去遊ばしたかも知れませんよ。』

『だつて下駄があるんだぜ。』

水鏡がまた下駄を見た時、丁度元二が水鏡の後から顔を出した。

勝彌は元二を見るより、

『奥さんを送届けたいらうね。』

元二は勝彌に叱責られる事と覺悟して居たのに、平生に變らぬ語調で斯う云はれたので先づ善かつたとも思へば氣味惡くも思ひながら、直ぐに下駄を穿いて格子戸を出て、

『奥さんの仰有る通に爲るより外詮方がありませんでした。』

『さうだッたらうね。では、直ぐ出掛ける事に爲よう。小川君、紫痕君と奥さんに宜く云つて呉れたまへ。』

『さうですか。宅の先生は、先生と美都子さんに、お上がり下さる樣にと申されますのですが。』

『いや、もう遲いから、今夜は御免を被る。よろしく云つて呉れたまへ。』

『まア御宜いぢやありませんか。』

聲を掛けながら出て來たのは都根子だ。

『久能木さん、今夜は失禮致しました。』

『いや、』とばかりで、勝彌ははや格子戸を離れながら、『紫痩君によろしく願ひます。元二君、さア行かう。』

勝彌は都根子が何か云つた樣だと思ひながら聞こえぬ振を爲し、元二と美都子とを伴ひ蛙原の方へ行つて了つた。

お玉は格子戸の内に入つて、

『奥さま、もう締を致しても宜う御在ますか。』

『あゝ、締めてお呉れ。』

都根子は座敷の夫の樣子は見ずに茶の間に入つて了ふ。

水鏡は座敷へ行き、

『先生、久能木さんは既う深更からと云つて歸られました。』

『さうかい。まだ深更と云ふほどでもないが、今夜の出來事に驚いたんだらうよ。何人だつて驚くだらうさ。』と、險しい眼を爲て茶の間を見返る。

水鏡は何とも云ひ樣が無いので、玄關へ行かうとすると紫痩が呼止めて、

『君、茶を持つて來て呉れないか。それに火鉢に火も無いのだ。』

水鏡が茶の間に入らうとすると、都根子が聲を掛けて、

『お茶もお火も今持たせて上げます。』

『さうですか。何卒。』とばかりで、水鏡はまご〳〵しながら玄關へ行つた。

『玉、お前お火を持つてッて上げてお呉れ。』

都根子はお玉に火を持せて遣つて、自分も後から夫の湯呑に茶を注いで持つて行き、

『御歸宅遊ばせ。』

紫痩は臺十能から火を火鉢に移して居て、都根子へは返辭をせぬ。

『よろしい。』

お玉が十能を持つて行つて了ふと、紫痩はむづかしい顏を爲て、じろり〳〵都根子の顏を見て居る。都根子も澄まぬ顏を爲ながら、何處を見るともなく眼を翁して居る。

紫痩は湯呑を取上げて茶を一口飲むと口を切つた。

『今夜のお前の態度には、久能木も驚いてた樣だ。』

『貴方は。』と、都根子は横を向いて云つた。
『私は寧ろ可哀相だと思つてる。』
『何樣意味でゝすか。』
『頃日のお前見たいな所作は、他の同情を得る道であるまいよ。』
『同情を得なかつたら――世間から捨てられたら何樣なるでせう。』
『問ふ迄も無いぢやアないか。』
『さうですか。それなら御問ねしないで、自分で考へませうさ。貴方もお考へなさる必要があるかも知れませんよ。』
都根子は立上つた。
『まアお待ち。』
『もう伺ふ事はありません。獨で考へれば解る事です。』
都根子は茶の間に行つて了ふ。紫瘦は苦い顔をして見送り、再び呼止めようとはしなかつた。

(三〇)

櫻花の春は瞬く間に過ぎ去つて四月の末となつた。彼の時以來都根子が元二に附纏ふさまは、勝彌をして深く眉を顰めしむる樣になつた。
都根子は毎日の樣に、生家へ行掛けであるの、歸途であるのと云つては柏木を訪た。勝彌は自分が立會か、美都子を立會せるかせねば、元二を都根子に會せない樣に注意して居た。無論元二を戒めて避けさせた事もあるけれども、都根子は其樣事には無頓着で訪ねて來た。勝彌は自分の留守に都根子が訪ねて來たなら無愛相に斷つて、元二に逢はせない樣にするばかりか、座敷にも通さない樣にと、元二の母にも注意して置いたのであるが、お瀧は些も其注意を用ゐないで、座敷へも通せば元二にも逢はせて、其間に何か興味でも有つて居るのではないかと思はれる事もある位だ。美都子は母の所爲に興醒めては、諫める事もあつたが、何時も爭になるのでつい默つて居る事が多く、若し此事が久能木に知れたら、

其間に面白からぬ衝突が起らうも知れぬと、私に心を痛めて居た。

柏木に訪ねて來るのは都根子ばかりでなく、紫痩も三日にあげず勝彌を訪問した。何か用があるのかと思へば然樣でもなく、何時も散歩の序に訪ねたのだと云ふ。けれども、其は口實であつて、都根子の樣子を探りに來るのである事は勝彌も想像して、寧ろ氣の毒に思ふのである。

此樣工合だから、都根子と紫痩が圖らず柏木で出會ふ事がある。そんな時には、都根子が前に來て居た時は、直ぐ暇を告げて去るし、紫痩が前に來て居る時は、都根子は玄關から辭去ッて了ふのであッた。

或日紫痩が勝彌の居室で話して居ると、都根子の案內を乞ふ聞が聲こえた。茶の間から取次に出て行つたのは美都子らしい。

『今日も亦御生憎ですはね。また伺ひますから、皆さんへ宜く仰有ッて下さいよ。』

『はい。まア御宜う御在ますでせう。』と、美都子が斯う云ッたのは一通の挨拶に過ぎないのだ。

『ですけども……へも宜く願ひますよ。』

座敷迄は聞こえぬほど低い聲で何か云ッて置いて、格子戸を締る音に續いて草履の音が爲たのは、都根子が辭し去つたのらしい。

座敷では其間二人とも無言で、互に目を顰して居た。

『久能木君、都根は何を爲に來るんだらうかね。此頃の樣に頻々と君の家を訪問するのには、何か仔細があるだらうと思ふんだが、君僕に話して呉れる譯に行くまいかね。』

『そりや無論話さんきやアならないけれども、實は僕にも其仔細が解らないんだよ。都根子さんにお尋ねすると、唯淋しいから遊に來るとばかり云つて居られるんだ。其以上は僕にしては問ようも無いし、また遊に來ると云はれるものを、不可いと云ふ譯にも行かんので、僕も實に困つてるんだ。』

互に顏を見合ながら苦笑を爲た。

『困つたねえ、君が其樣事を云つて居るんちやア。』と、紫痩は猜疑の眦を笑に紛らしながら、『何か仔細がなきやアならない筈ちやアないか、ねえ苔川君。』

「それはあるかも知れないね。併し、僕へ何にも話されないから解らない。」
「君以外の人とは、談話を爲る事は無いのかね。」
「いや、其はある樣だ。」
「何人と談話をするかね。君を除いて最も親く爲て居るのは何人とだね。」
「さア、其は如何しても元二君との樣だ。」
「ふうむ。」と、紫瘦は冷かな笑を浮べながら、「元二君は今日は留守かね。留守でなきやア、鳥渡逢ひたいんだがね。如何だらう。」
「いゝとも、些とも差支は無いさ。今呼ぶから逢ひたまへ。」
勝彌は茶の間を見返つて、
「美都子さん、兄さんが御居でなら、來て下さいと云つて下さい。」
美都子は座敷の入口に出て來て手を支いて、
「兄は先刻何處かへ出掛ました。」
「先刻かね。」と、勝彌は凝乎と美都子の顏を見た。
「然樣です。太田さんが入來ッしやいますと、間も無く出掛けましたのですよ。」
「では、詮方が無い。貴女は彼方へ行つて下すッて可いんです。」
「はい。」と美都子は退いた。
「今留守ださうだよ。併し、いまに歸ッて來るだらう、何時迄もぶらぶ〳〵歩いてる男で無いんだから。」
「なに強て逢はないでも可んだ。」
紫瘦はまた苦笑を爲たが、軈て膝を進めながら小聲になり、
「蒼川君、彼婢には僕も實に當惑してるんだ。如何處置したものか、僕は其手段に窮してるんだが、君何か思付いた良策はあるまひかね。妻が今日の樣では、僕は沈着いて作を爲てる譯にも行かないし、非常に困ッてるんだが、何か良策はあるまひかね。」
「さア。」とばかりで、勝彌は唯紫瘦の顏を見て居るのみだ。
「僕は實に困るんだよ。妻が毎日朝から外出して、夜も九時前後にならなきやア、歸らないんだから、家内は宛然野原見たいに寂寞としてえてね、淋しいのか、不愉快なのか、何か知

らないけれども、僕は實に勝へ得ないんだ。だから、僕も斯して出て歩いてるだらう、家内には君、小川と下女とが徒空然として居ようと云ふものだ。此樣ぢやア、家庭も何もあつたもんぢやアない、却つて其爲に苦んでる樣なものなんだ。君、何か良策は無からうかね。僕は君だから此樣に打明けて話すのだけれども、他の友人には樣子を覺られるのも辛いんだからね。君、僕に同情して呉れるなら良策を授けて呉たまへな。僕は實に君に賴むんだ。」と、云了つて悄然として居た。

勝彌も此頃の都根子の所作は指彈をして憎んで居るのだから、紫痩の苦痛に充分同情して居るけれども、さて如何にすべきかと云へば、施すべき手段とては思得ぬ。自分が紫痩であッたら、都根子を離緣して了ふのだけれども、紫痩に然樣せよとは云難い。また云ふべき事で無いかも知れぬとも思ふ。けれども、良策と云へば其他には無いと思ふのだから、止むを得ず默ッて居るので。

「蒼川君、君にも良策が無いんだと見えるね。あゝ、僕はもう君からも救はれる事が出來ないんだ。」と、がッくり頂低れて太息を吐く。

「君、其樣に落膽して居たッて詮方が無いだらう。」

「だけれども君、僕は實に苦痛に勝へないんだ。」

「それは察しる。けれども、僕にも良策は無いんだ。唯今一度、君が妻君と熟議して見るんだね。それでも行かない時には、又手段があらうぢやアないかね。兎に角、今一度妻君と妥協を試みて見たまへ。」

「それは到底駄目なんだ。僕の云ふ事なんざ天から受付けないで、少し强い語でも出さうもんなら、直ぐに離婚問題を提出すんだから、始末にいけないんだよ。」

「妻君は相變らず離婚問題を提出すんだね。」

「それだから困るんだよ。」

勝彌は弱り切ッて居る紫痩の顏を屹度見て、力のある語調で、

「君、いッそ離婚しちやア如何だ。それが唯一の良策ぢやないかと僕は思ふんだ。」

「なに離婚しろッて。」

紫痩は驚愕の眼を睜ッて、屹度勝彌を見た顏に、不平の色が浮んだ。

『紫瘦君、君は僕の云つた事を――離婚しちまへと云ッたのを、不快に思ッてる樣だね。』

『不快に思ふ譯では無いけれども、離婚するのは殘酷だからね。さうする位なら、何も君の助言を待つ迄も無いんさ。さうしないで、如何にか好い方法がありやせんか知ら、君には或は良策があるかも知れないと思ッたから相談したのさ。離婚する位なら、煩悶しやアせんけれども、其處にはまた、局外者には解し難い事情もあるものだからねえ。』と、ねち〳〵と斯う云ッたが、勝彌の思惑が氣遣しくなッて、『君、惡く思ッて呉れちやア困るよ。君の意見を求めて置きながら、局外者には解し難い事情があるなんて云ッたら、それならば何も相談するに及ばんぢやないか、怪からん男だと思ふかも知れないけれども、君何卒惡く思はないで呉れたまへよ。離婚するなんて事を、一言でも僕の口から出さうもんなら、其こそ彼婢の策に陷る樣なものなんだからねえ。あゝ困つた。實に困つた。』

勝彌は何とも云はなかッたけれども、紫瘦を見据えた眼に冷笑の浮ぶを禁じ得なんだ。

『今日の有樣では、唯悩むばかりで作は出來ないしさ、僕は煩死するより詮方ない。實に不幸だ。』と、深〳〵太息を吐いた。

『君は何故其樣意志が弱いんだ。其意志の弱いのが君の第一の缺點なんだ。意志が弱いから流行を追うて行動するし、一つ躓けば落膽するし、失敬な事を云ふ樣だが、餘り意氣地が無さ過ぎるんだ。妻君は其弱點を見拔いてるから、何樣事を云出しても、君が何とも爲得ないと思ふから、君に對して直ぐ離婚問題を提出するんだ。勝手次第に遊んで歩くんだ。君の樣に意志が弱くッちやア、到底何も出來やせん。僕は相談に預る事は御免被むる。』

勝彌は斯程云ッたら紫瘦が大いに反抗するだらうと思ッた。以前の紫瘦なら無論無禮呼りを爲て怒るのであるが、今はそれほどの勇氣も無いらしい。でも、眼を輝かし唇は噛んだが、漏れるものは太息ばかりだッた。

『蒼川君、君も僕を捨てるんだね。』

『捨てる捨てないは第二の問題だ。それよりかも、僕は君に忠告する事がある。けれども、君は用ゐ得まい。』

『用ゆる用ゐないも第二の問題なんだ。兎に角話して呉れたまへ。』

『なら話すが、君が大いに妻君に對して奮鬪するんだ。』と、微笑みながら紫瘦を見る。

紫痩は吃驚して、
『妻と奮闘しろッて、』
『さう。』
『如何するのかね。』
『服従させるか、放逐するか、其最後まで奮闘して見たまへ。』
紫痩は暫時考へて居たが、
『其結果は如何なると思ふかね。』
『放逐するか、服従させるかの一つさ。』
『服従して呉れりや可いけれどもねえ。』
『服従爲なきやァ放逐したまへ。君の妻君の今日の所作は實に卑むべしだ。君の妻君でなきやァ、僕の處に寄付けやァしない。最初は君が悪いから、僕は妻君に同情して居たんだがね、今日では寧ろ君に同情してる。君、それに付いても少し考へるが可いよ。作の人氣を氣にする、唯流行を追ッて作を爲る、他の主義の受賣をする、それで以ッて作家として立たうとしたッて、何時まで生命があるものかね。朝に生れて夕に死する蜉蝣の樣なものなんだ。作家としての操守と云ふもんが無きやァ其作家は零なんだ。今度の妻君の事だッて、君に確乎たる操守がなくッて、他の主義の受賣をして漫然誇ッてた結果ぢやァないか。加之に、今日になッても尙ほ今見たいな事を云ッてる樣ぢやァ、僕は到底相談相手にはなれない、斷じて御免被むる。』
紫痩は勝彌に罵られる樣な氣がして口惜しいが、反抗するほどの勇氣もなく、唯凝然と考へて居た。
格子戸を徐々と開ける音がした。勝彌は聞慣れない開樣をするのは何人であらう。或は元二が私と歸ッて來のかも知れぬと思ふ間に、茶の間から美都子が玄關へ出て行ッた樣だ。
『誰かと思ッたら……叔父さんお歸りなさい。』
『お客がありさうだから、態と徐かに開けたんだよ。お客は何人だい。久能木さんのお客らしいね。』
長夫が斯う云ッた聲が座敷に能く聞こえた。

『先生のお友達の太田さんが居ッしやいますの。』

『さうかい。紫瘦先生がお居でなんだね。私は彼の先生の小説が好きなんだ。久能木さんに願ッて紹介して貰ひたいんだ。』

長夫は美都子に話を爲ながら茶の間に入ッた樣子だ。

勝彌は聲を潜めて、

『紫瘦君、彼先生に小説の御話を伺ひたう御在ますと來られた日にやア、一時間や二時間は弱らされるんだ。妻君の相談なんざ、到底出來ッこなしだよ。』

『さうかい。そいつは大變だね。』と、紫瘦は眉を顰せて、『僕はお暇する事に爲よう。妻の事に就いては、尙ほ考へて置いて呉れたまへ。』

『考へては見るが、君が勇氣を出さんきやア駄目だよ。』

『僕だッて、去來ッて云ふ時には出すさ。賴むよ。い〳〵かい。』

紫瘦は俄かに暇を告げて辭し去つた。

長夫は服を着替へて、臺所で顏を洗ッて座敷へ行くと、紫瘦の影も見えないのである。

『紫瘦先生が御居でださうですが、』

『今辭去ッたところです。』

『えッ、もう御辭去でしたッて。御紹介を願はうと思ッてましたのに、殘念な事を爲ましたよ。』

『今日にも限らんでせう。』

『それは然樣ですが、殘念でした。今度機會がありましたら、是非御紹介を願ひます。』

『機會さへあれば何時でも紹介します。』

『何卒願います。』

勝彌は長夫に話込れては大變だと思ふので、態と机に對ッたけれども、長夫は其樣事に頓着なく、根が張ッた樣に坐つた。

『僕は紫瘦先生の小説が非常に好なんですよ。實に巧いと思ふんですが、如何でせう。』

『さう。なか〳〵巧く描いてある樣です。君が紫瘦の愛讀者と云ふ事を話したら、當人も大いに喜ぶでせう。』

『喜ばれるでせうか。』と、長夫は大得意で、『僕と紫瘦先生と趣味の上に或一致がある樣でして、彼先生の御作を拜見しますと、僕は何時でも自分の事を描かれてるんぢやないかと思ッて、可怖くなる位ですよ。ですから、一度御目に掛つて質問たいと思ッてるんです。』

勝彌は苦笑を爲ながら、

『紫瘦の作中の人物と君と……。』と、流石云淀んで、『さう、今の青年には、彼男の作物に在る樣な人間が多いかも知れんですね。』

『無論ですとも。紫瘦先生は、眞箇現代青年に同情を有ッて居られると思はれるです。僕は愛讀者と云ふよりは、寧ろ崇拜者と云ふ方でせうよ。』

『紫瘦も名譽だ、君見たいな崇拜者を有ッてるんぢやね。』

勝彌が高く笑ふと、長夫も得意になッて同じく高く笑ふのだ。

其處にひよッこり元二が入ッて來た。

勝彌は元二を見上げて、

『君は何處へ行ッて居たかね。』

『何處ッて事も無く、青山の練兵場の方を散歩して來たんです。』と、坐りながら云ふ。

『さうか。途中で紫瘦に會はなかッたかね。』

『太田さんには逢ひませんでしたが、奥さんには逢ひました。』

『何處で。』

『大番町です。』

『ふうむ。』と、勝彌は考へて居たが、『で、何とも云はなかッたかね。』

『十二社へ行きませうッて誘はれたんですけれども、謝絶ッて歸ッて來たんです。』

『さうか。それは可かッた。今後また其樣事があッたら、斷じて謝絶するが可いよ。』

長夫が傍から嬉笑を爲ながら、

『まだ瀧には早いし、十二社とは乙だね。太田の奥さんも、大いに自然主義がッてると見えるね。は、は、は、。』

『自然主義も、其樣場合に用ゐられる或種の代名詞となッて了ッちやア可哀相だ。併し、此も一時の人氣取に安用したもの、罪だから詮方が無いね。』と、勝彌は苦笑をした。

『美都ちやん、叔父さんの煙草盆を持ッて來てお呉れ。』

勝彌は此上長夫に話込れるのは苦痛だと思ふ。元二は早くも其と覺ッて、

『先生は御用がおあんなさるんでせう。』

『實は少し讀んで置かなきやアならないものがあるのさ。』

『さうですか。ぢやア、僕は彼方へ行く事に爲ませう。』

元二が茶の間に行ッたので、長夫も詮方がなしに行ッて了つた。

勝彌は差掛ッて讀まねばならぬものがあるのではないが、既に紫痩との談話に疲勞れ、長夫の相手になッて居るのは勝へ難かッたのである。

紫痩の樣に勇氣が無くても困るが、都根子の樣に放姿になッて了ッた女には手も附けられない。双方とも今見た樣な態度を續けて居ては、何時までも解決の着きようがあるまい。紫痩とも友人として交際ッて居る以上は、早く今日の苦境から脱しさせたいけれども、双方彼の有樣では如何とも手の出しようが無いのに當惑する。明日はまた都根子が來ようから、彼の思惑は如何あらうとも、乃公の思ふまゝを話して見て、其を用ひぬ樣であッたら、以來斷じて出入を爲せぬ事に爲なければならぬ。紫痩等の作物が世の青年を誤るのと同樣に、都根子の所作の如きも、彼を見聞する若い婦人に確かに惡感化を與へる。乃公の傍には美都子が居るでは無いか。女神の如く清淨無垢な少女に、都根子如きと語を交させるのも心すべきでは無いか。都根子が明日來たなら、乃公の思ふまゝを是非斷行せねばならぬ。其成行に依ては、或ひは、紫痩と交際を斷つ樣な事になるかも知れぬが、それは止むを得んとして、明日は斷じて行はねばなどと考へて居る。

『先生、お茶が入りました。』

美都子が勝彌の湯呑を盆に載せて持ッて來て進めた。

『難有う。』と、都彌は湯呑を取上げながら、『美都子さん、貴女は都根子さんを如何思ふかね。』

『私には分りませんは。』と、美都子は伏目になる。

『分らん事は無いでせう。私は然樣思ふ、彼人なぞは貴女が交際ふべき人ぢやアない。貴女も以來成るべく、逢はない樣にするが可いよ。』

『はい』と、美都子は頭を下げた。

『もう一杯下さい。』

勝彌が湯呑を出したのを、美都子は盆に受けて茶の間へ行つた。

（三一）

其翌日勝彌は都根子が來訪なら、都根子が頃日來の所行について大いに忠告し遣らんと待構へて居たけれども、不思議にも姿さへ見せない。其次の日も、また次の日も終に來ないのである。都根子ばかりでなく紫瘦も來ない。別に望んで來て貰ひたい事は無いけれども、彼後如何したらうか、二三日内には訪ねて樣子を見て遣りたいとも思ッて居た。

斯くして三五日過つ中に、柏木一家の人々の心は憂の雲に覆はるゝ事件が發つた——末の子の鐵三が突然急性の肺炎に侵されて、此一兩日は最も懸念すべき時期であると云ふ。祖母の千代乃と母のお瀧とは泣の涙で枕頭に附いて居り、美都子は兄に顏を見合せて太息を吐くと云ふ爲體である。

勝彌は此樣事があるので、紫瘦を訪ふどころでなく、柏木家の人々に劣らず心を傷めて居た。

『美都子さん。』

美都子の影が玄關の方に見えたから、勝彌は聲を掛けた。

『はい。』、と足音に注意しながら、座敷に入つて來た美都子の眼には涙が見えた。

『鐵ちやんは今何樣ですか。』

『今能うく睡ッて居ますよ。』

『ようく睡ッて。』と、勝彌は首肯きながら、『では少しは佳い方だと見えますね。』

『能く睡ッてるのは佳しいので御在ますか。』

『僕は然樣思ふんです。併し、醫師でなきやア分らない事だから、今日今一度醫師に來て貰ふが可いでせう。』

『御祖母さまも然樣申しますから、私今、御醫師を迎にまゐるところで御在ます。』

『貴女が行くのかね。』

『はい。』

『元二君は居ないですか、』

『兄さんは臺所で顔を洗つてお居での樣でした。』

『鳥渡呼んで下さい。』

美都子が臺所に呼びに行ッたので、元二は手拭で顔を拭き〳〵座敷へ來た、

『美都子さんが醫師を呼びに行くと云ふんだがね、君が行ッて呉れちやァ如何かね。君の方が足が早からうし、待ッて〻連れて來るのにも都合が可いし、さうして呉れちやァ如何かね。美都子さんは内の方に用があらうと思ふから、然樣して呉れたまへな。』

『え〻行ッて來ます。』と、元二は斯う云ッたけれども、美都子が勝彌に賴んで斯う云はせたのではないかと不快に思つて、『先生に御話しないで、直接に兄さんに云ふが可いちやァないか。』

『は〻は〻。また初めたね。』と、勝彌は笑ひながら、『君は能く誤解して能く怒る人だね。美都子さんが僕に賴んだんちやァない、僕が其方が可いと思ふから云ッたんだ。鐵ちやんを可哀相だと思ッたら、誤解したり怒ッたりしてる時ぢやないだらう。』

元二は急かに悄乎て頭を掻きながら、

『怒ッたんぢやァないですけれども、』と、きまり惡るさうに微笑しながら、『直ぐに行ッて來ます。』と、美都子を見送り、『容體は如何云ふのかね。』

勝彌は美都子に代つて、

『兎に角來て貰ひたいんだから、成べく君が引張つて來たまへ。』

元二は詮方がなしに醫師を迎にと出て行つた。

『美都子さん、鐵ちやんを座敷へ移す事にしては如何です。今寢かしてある處は、風通が惡いから、病氣の爲にも無論不可いでせう。僕に遠慮なさる事は無いから、母さんに御話なすッて下さい。』

勝彌は遲ふ樣にして茶の間の方を差覗きながら云つた。

『ですけども、先生が御勉强遊すのに、』